南国市埋蔵文化財報告書 第15集

岩村地区県営圃場に伴う
岩村遺跡群発掘調査概要

1996. 3

南国市教育委員会

Ⅰ区完掘状況全景

序

高知県下には、現在、約2,500個所を数える遺跡が所在することが知られており、このうち南国市には、200個所以上の遺跡が所在し、県内市町村の中で最も多くの遺跡が残されております。

南国市は県中央部に位置し、市域は高知平野の大半を占めるなど、恵まれた自然環境をもち、古来土佐の文化の中心地でありました。このため、高知県の歴史を理解するうえで重要な遺跡が集中しており、代表的な遺跡については、これまで国・県・市指定史跡として保存措置が構じられてまいりました。しかし、近年南国市においても急速な勢いで進展する各種開発事業に伴い、遺跡の記録保存のための発掘調査等の件数も増加の一途をたどっており、過去にも多くの遺跡が調査されています。

南国市教育委員会では、岩村地区県営担い手育成（圃場整備）事業に伴い、岩村遺跡群の発掘調査を、今回は第一次調査として実施いたしましたところ、弥生時代中期から中世、近世に至る遺構・遺物が数多く発見されました。

本書は、その発掘調査の成果をまとめたものです。本年度の成果により、今後の調査に一層の期待が寄せられます。

最後に、調査にあたって御指導をいただきました出原恵三氏、並びに調査に深い御理解、御協力をいただいた地権者の皆様方、関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成８年３月

南国市教育長　西 森 善 郎

例　　言

1　本書は、平成７年度岩村地区県営圃場整備事業に伴う、岩村遺跡群の発掘調査の報告書第１集である。

2　岩村遺跡群は高知県南国市福船にある。

3　今年度の全調査面積は2,345㎡であり、１区、２区と分けて調査をおこなった。当報告書は１区のものである。１区、２区を通じての調査期間は平成７年９月29日～平成８年２月７日である。

4　発掘調査は、高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て、南国市教育委員会が主体となって実施した。各役割分担は以下のとおりである。

調査員	横井理恵	南国市教育委員会	埋蔵文化財担当	嘱託職員
	武市義浩	〃	〃	臨時職員
庶務担当	坂本芳史	南国市教育委員会	社会教育課主事	

5　本書の執筆、編集は坂本芳史、武市義浩がそれぞれ分担し、おこなった。

6　現場作業においては、高知県埋蔵文化財センターの出原恵三氏の協力を得た。
整理作業においては特に同センターの山中美代子・大原喜子氏の協力を得た。
記して深く謝意を表したい。

7　現地の測量にあたっては、新日本測量の協力を得ておこなった。なお、発掘調査にあたっては、ご理解、ご協力をいただいた地元改良組合をはじめ、地元住民の方々、及び、現地作業員、整理作業員の皆様のご援助に対し、記して深く謝意を表したい。

8　当遺跡出土資料は、南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は95－ＮＩである。

本 文 目 次

第１章　調査に至る経過 …… 1

第２章　周辺の地理的、歴史的環境 …… 2

第３章調査の成果 …… 5
　１．基本層準 …… 5
　２．検出遺構と遺物 …… 5
第４章　考案 …… 18

押 図 目 次

Fig. 1　岩村遺跡群の位置と周辺の遺跡 …… 3
Fig. 2　岩村遺跡群調査区位置図 …… 4
Fig. 3　岩村遺跡群１区検出遺構全体図 …… 8
Fig. 4　調査区北壁セクション・堀平面・堀セクション図 …… 9
Fig. 5　堀Ａ出土遺物実測図 …… 10
Fig. 6　堀Ａ出土遺物実測図 …… 11
Fig. 7　堀Ｂ出土遺物実測図 …… 12
Fig. 8　ＳＫ２・７・８・11平面、エレベーション、セクション図 …… 13
Fig. 9　ＳＫ14～16・18・20平面、エレベーション図 …… 14
Fig.10　ＳＫ７・25出土遺物実測図 …… 15
Fig.11　出土遺物実測図 …… 16
Fig.12　出土遺物実測図　ＳＤ２－１・２・３ Ｂ堀 ＳＤ２－１(61) ＳＤ２－２(60) ＳＤ２－３(58) 堀Ｂ(59) …… 17
Fig.13　ＳＫ21・23平面エレベーション図 …… 17

写真図版目次

ＰＬ．１　調査前風景（南から）・同（北西から）
ＰＬ．２　ＳＫ７・同壁溝セクション
ＰＬ．３　堀　完掘状況・同中央バンク南壁
ＰＬ．４　堀　全景（北から）・ＳＫ14　完掘状況
ＰＬ．５　ＳＫ25　西壁セクション・ＳＫ21　完掘状況
ＰＬ．６　ＳＤ２－１　遺物出土状況・ＳＫ７　遺物出土状況
ＰＬ．７　ＳＤ１４　遺物出土状況・同拡大
ＰＬ．８　発掘風景・同
ＰＬ．９　堀・ＳＫ７・ＳＤ２出土遺物・同裏面
ＰＬ．10　堀・ＳＫ７、25・ＳＤ２出土遺物
ＰＬ．11　堀・ＳＫ７出土遺物
ＰＬ．12　堀・ＳＫ７出土遺物

第１章　調査に至る経過

南国市岩村地区においては、平成６年度より高知県三大河川の一つである物部川右岸の農地50.6ヘクタールを対象とした岩村地区県営圃場整備事業が開始され、狭隘で不整形な農地の区画整理や統合、農道・用排水路等の系統的な整備を進め近代的な農地への転換を計っている。近年特に多用化しつつある農業に対応し、合理的な経営と集約農業による農家所得の増収を保障しようとするものである。

一方、当事業対象地区内には、先史時代以来今日まで、南国市を築き上げてきた祖先の営みの跡とも言うべき岩村遺跡群が存在している。

岩村地区遺跡群は、岩村遺跡と岩村土居城跡の総称である。個々の遺跡は私たちの祖先が厳しい自然と戦いながら大地に刻み込んだ偽らざる、そしてまた二度と繰り返すことのない歴史である。埋蔵文化財は、過去の事実を蔵しているのみならず歴史の歩んできた方向性を示し、現代社会を生きる私たちにとっては、「未来への羅針盤としての役割を担っているところの真に国民の共有財産として位置付けられている。」南国市教育委員会は、遺跡のもつかかる重要性に鑑み、開発部局に対してその保護と調和のとれた開発行為の実施について数次にわたる協議を重ね、特に遺跡部分の削平面積については極力少なくするよう工法等についての検討を願って来たところである。そして道路・水路・深度によって異なるが削平部分については、南国市教育委員会による試掘調査の結果によって必要と認める部分については記録保存のための本格調査を行うこととなった。まず平成６年度に、平成９年度事業対象地区にある遺跡範囲について試掘調査（試掘面積205㎡）を実施した。

この調査の成果から、南国市岩村字城の東周辺より弥生時代後期の竪穴住居跡・溝跡・柱跡等が、また奈良～平安時代の溝跡・柱跡、室町～戦国時代の井戸跡・柱跡・土杭等が検出され、土器等の遺物が出土。加えて、岩村土居城跡からは鎌倉末～室町時代・戦国時代の溝跡・柱跡・土杭等が検出され、これまで不明であった城跡の様相が次第に明らかになってきた。これらのことを含まえて、岩村遺跡群は弥生時代後期から戦国時代にかけての広範囲な複合遺跡であることが判明し、その範囲は当該圃場整備事業の計画区域内のなかだけでも約50,000㎡におよぶとみられる。

その結果、平成７年度は、第一次本調査（本調査面積2,345㎡）をⅠ区・Ⅱ区と別けて実施した。

第2章　周辺の地理的、歴史的環境

1 地理的環境

岩村遺跡群は、南国市の東端、県下三大河川の一つであり、剣山系の白髪山に源を発し、流路延長70.5kmの物部川河口から約3km程上流にのぼった西岸に位置し、現地表は、海抜19.8m前後を測る。岩村遺跡群の所在する南国市は、東西に弧状の長い海岸線を有する高知県のほぼ中央部にあり、県下最大の平野である、高知平野の東部に位置する。高知平野の中でも、南国市、土佐山田町、野市町及びその周辺の平野部は、香美郡と長岡郡に属していたことから、香長平野とも呼ばれており、本県最大の穀倉地帯を誇っている。

香長平野は、物部川によって、その大部分を形成されており、物部川に沿って沖積扇状地が、その両側に開析扇状地が発達する。開析扇状地は、土佐山田町、野市町方面に発達し、沖積扇状地は、土佐山田町岩積付近以南の現河道西側に広く分布している。

物部川と香長平野が今日のような、景観を呈するようになったのは、中・近世以降のことである。それ以前は、岩積付近が、自然の吐流口となって、幾筋もの流派をなしていたが、中世になると、それまで多数存在していた小流路の幾つかが、堆積作用によって埋まり、大きな自然堤防が形成され、物部川の流路の定着化が始まったと考えられる。さらに近世になると、堤防強化や流路の変更工事がなされ、周辺に点在する自然堤防の削平や窪地の埋め立て等が行われ、現河道西側の低湿地帯は、次第に水田化され、反対に東側は削平され、今日とほとんど変わりない景観を呈するようになった。

2 歴史的環境

南国市は、物部川、国分川により、形成された沖積平野である高知平野の大半を占めているところから遺跡の密度も高く、各時代の遺跡の所在が知られており、近世以前は土佐の中心地として栄えた地域である。

縄文時代の遺跡は少なく、数ケ所確認されているにすぎない。岡豊町定林寺に栄エ田遺跡、南の平野部では田村遺跡群のLoc.47などが所在する。

弥生時代の遺跡は数多く知られ、中でも田村遺跡群では前期初頭の集落跡と水田址が検出され、中～後期にかけての集落跡も確認されており、高知平野における拠点的集落であったと考えられる。

古墳時代の遺跡としては、6～7世紀の横穴式石室をもつ古墳が北部の山麓部及び独立丘陵上に多数存在している。南国市北部の岡豊、国分、長岡方面では集落址が分布し、土佐国府跡の発掘調査で6～7世紀の縦穴住居址が30棟前後検出されている。

古代から中世においては、土佐国府跡、土佐国分寺跡、比江廃寺跡などの遺跡が位置している。岩村遺跡群内には、岩村土居城跡があったとされ、現状は水田の中に城の北西隅及び東北隅部分と考えられる土塁状地形がL字状地形として残存し、その外側に掘跡を踏襲したと考えられる俠長地形の水田が存在する。

Fig.1　岩村遺跡群の位置と周辺の遺跡

番号	名　称	時　代	番号	名　称	時　代	番号	名　称	時　代
1	岩村遺跡群	弥生～中世	11	横落遺跡	弥生～平安	21	北角田遺跡	弥生～平安
2	若宮遺跡	弥生～平安	12	桧物ケ内遺跡	古墳～平安	22	立田土居城跡	中　世
3	垣添遺跡	古墳～中世	13	カントヲリ遺跡	縄文･古墳～平安	23	修理田遺跡	弥生～平安
4	包地土居城跡	中　世	14	表中内遺跡	弥生～平安	24	田村遺跡群	縄文～近世
5	芝田遺跡	古墳～中世	15	上横田遺跡	古墳～平安	25	田村城跡	中　世
6	ムロカ内遺跡	弥生～中世	16	大北遺跡	古墳～中世	26	千屋城跡	中　世
7	屋根添遺跡	古　墳	17	平杭遺跡	弥生～古墳	27	季重遺跡	古墳～近世
8	芝ノ端遺跡	古　墳	18	高添遺跡	弥生～平安	28	公家ノ前遺跡	古墳～近世
9	石神遺跡	弥生～平安	19	寺ノ前遺跡	弥生～中世	29	司例田遺跡	古墳～近世
10	古流曽遺跡	古墳～平安	20	徳弘土居城跡	中　世	30	中屋敷遺跡	弥　生

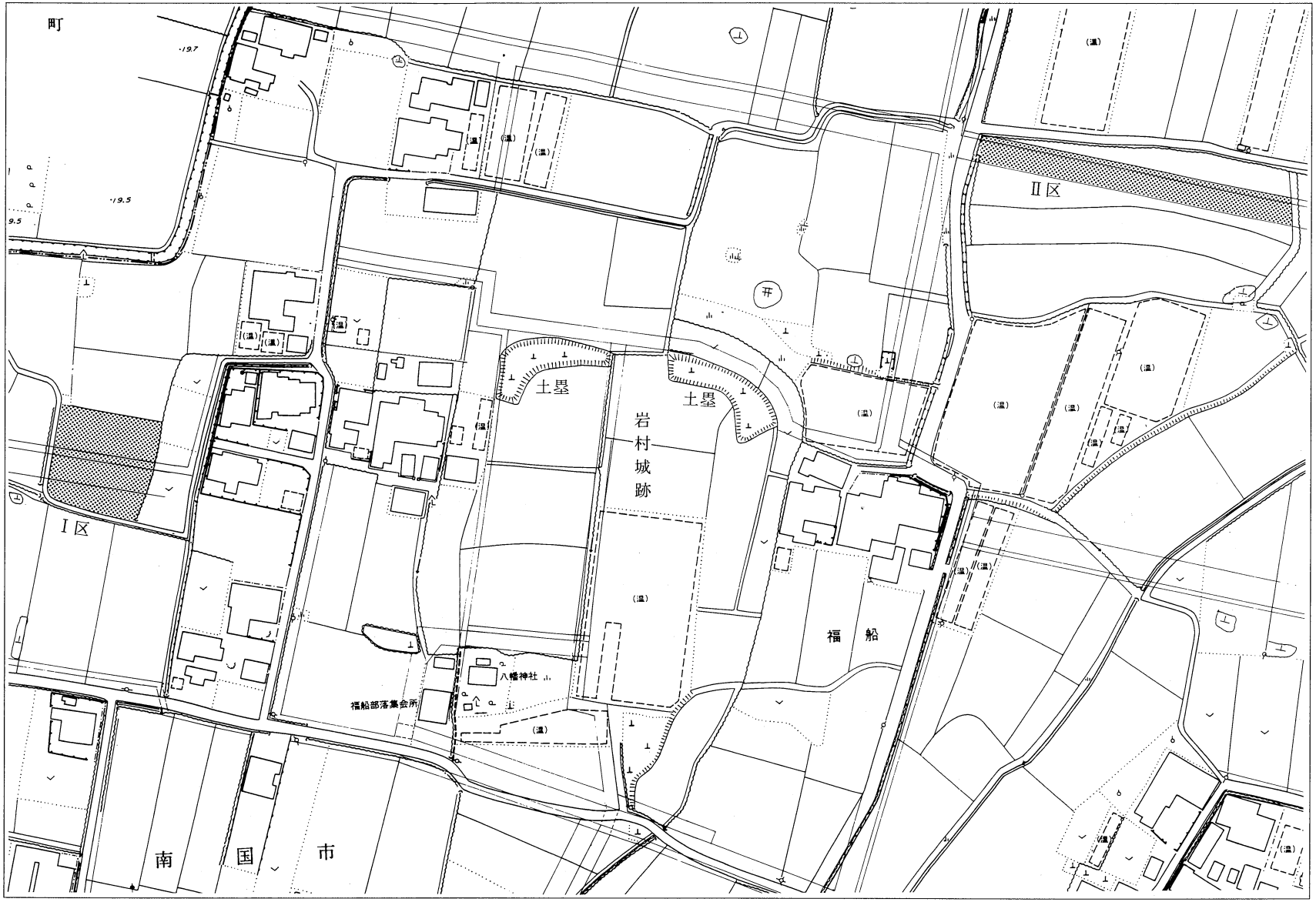


Fig.2　岩村遺跡群調査区位置図

第３章　調査の成果

１．基本層準（Fig. 4）

現表土（耕作度）と床土を除くと茶灰色粘質土の中、近世の遺物包含層が20～30㎝の厚さで堆積しており、その下は砂層あるいはシルト層となっている。これらの砂層～シルト層は物部川による新期沖積層である。この砂層～シルト層（Ｖ層）上面が中・近世の遺構検出面となっている。

Ⅰ層：耕作土

Ⅱ層：床土

Ⅲ層：茶灰黄色粘質土（中・近世遺物包含層）

Ⅳ層：灰茶色砂層

２．検出遺構と遺物

堀（Fig. 4～7）

調査区の西端の現畦畔にそって南北方面に伸びる遺構である。延長25ｍまで確認できた。幅は1.8～2.0ｍ、深さ60～80㎝を測る。断面はＵ字形を呈しており西肩はそのまま現在の畦畔となっている。検出の段階では１条の溝状遺構として捉えたが、断面観察から２条の溝が重複していることが明らかとなった。先に掘られた溝を堀Ａ、新しい方を堀Ｂとする。堀Ａは埋土Ⅲ・Ⅳ層あるいはⅢ、Ⅳ、Ｖ層からなっており、埋土中・床面から土師器小皿（１，２）同杯（３～５）、東播系須恵器椀（６）、青磁椀（８～12）、白磁椀（７）、天目茶碗（13）、土師器こね鉢（14）、備前擂鉢（15）、瓦器鍋（16～20、22）、東播磨系土師器鍋（21）、土師器鍋（23）、が出土している。これらの遺物は10世紀代から15世紀代に及ぶが、堀Ａが掘削され機能した期間は、ほぼ15世紀代と考えられる。一旦堀Ａの西側埋土を切って堀Ｂが掘削されている。堀Ｂの西壁上部には部分的に石垣の基部のような石列が確かめられる。また堀Ｂの埋土中には、人頭大の河原石が多く見られるが、この石垣状遺構からの崩落によるものと考えられる。埋土Ⅰ・Ⅱ層よりは、18～19世紀代の上絵付椀（24）、肥前系の銅緑釉を施した内面蛇ノ目状削りの皿（29，31）、染付け椀（30）、備前擂鉢（33）、唐津鉢（32）、などが出土している。したがって堀Ｂは近世（18～19世紀）に機能した堀とすることができよう。この２時期にわたる堀は、田村遺跡や十万遺跡で確認されている中世末、近世における屋敷地を囲む堀としての性格が考えられる。

ＳＤ２（Fig.12）

調査区の東端、北方を逆Ｌ字状に走る。すべて関連性があると思われるが、調査、遺物の取上げを別々に行ったため、便宜上３ケ所に分けた。総延長29.6ｍで、ＳＤ２－１、長さ11.76ｍ、幅50～90㎝、深さ６～９㎝を測る。ＳＤ２－２、長さ６ｍ、幅30～45㎝、深さ５～13㎝を測る。ＳＤ２－３、長さ11.84ｍ、幅45～90㎝、深さ８～11㎝を測る。断面形は舟底ないし逆台形を呈する。埋土は茶褐色粘質土である。

ＳＤ２－１　調査区の東端を南北に走り、北方は西よりに少し曲折している。南方はＳＫ７に掘

り込まれており、ＳＫ10に切られている。出土品については19世紀近世陶磁器椀（61）土師器細片が出土している。

ＳＤ２－２　調査区の北方を東西に走っている。ＳＤ18の東側に位置している。出土品については19世紀近世陶器皿（60）、が出土している。

ＳＤ２－３　ＳＤ２－２と同じく、調査区の北方を東西に走っており、東端をＳＤ18に切られている。西方はＬ字形に南方へ屈折している。出土品はＳＤ２－１、ＳＤ２－２から出土した陶器より古い15世紀頃の陶器が出土したが、混入品であると思われる。又、調査区南西隅にあるＳＤ12とつながると思われるが、完掘できず、関連性は分からない。

性格については、調査区の東方約300ｍの場所に岩村土居城跡があり、その家臣団の屋敷地を囲繞する溝の可能性があると考えられる。

土坑

ＳＫ２（Fig. 8）

調査区の北東に位置する。隅丸方形の平面形を有し、長径1.62ｍ、短径0.84ｍ、深さ0.40ｍを測る。床面は中央部が少しくぼんでおり、西壁が斜めに立ち上がっている。埋土は灰黄色粘質土である。出土遺物は、埋土中に土師器、須恵器、瓦質土器などの細片が数点出土している。

ＳＫ７（Fig. 8・10）

調査区の東南端に位置する。長方形の平面形を有し、長径2.84ｍ、短径0.72ｍ、深さ0.80ｍを測る。ＳＤ２と一体のものであるが、深く掘りこまれているため、独立のものとして捉えた。埋土はおおむねⅠ～Ⅴ層の粘質土及び粘土からなる。Ⅴ層に木葉などを含み、水たまりの沈殿のような状況であった。遺物はⅠ～Ⅳ層から備前焼擂鉢（39，40，55，56）、陶器甕（57）、染付腰折れ陶器（53）、Ⅴ層からは灯明皿と考えられる、土師器土器小皿（45，46）染付椀（49，50）京焼風上絵付椀（51）尾戸焼椀（54）平瓦等が出土している。

ＳＫ８（Fig. 8）

調査区の南方に位置する。楕円形の平面形を有し、長径1.74ｍ、短径1.40ｍ、深さ0.54ｍを測る。床面は平坦である。埋土は灰黄色粘質土である。遺物は石臼１点、京焼風椀１点、土師器細片、瓦片などが数点出土している。

ＳＫ11（Fig. 8）

調査区の中央部に位置する。不定形の平面形を有し、長径0.94ｍ、短径0.92ｍ、深さ0.24ｍを測る。床面は平坦で、浅い土坑である。埋土は茶灰色粘質土で、遺物は土師器杯片が数点出土している。

ＳＫ14（Fig. 9）

調査区の南方に位置する。ＳＫ８の西に接する。楕円形の平面形を有し、長径2.68ｍ、短径1.80ｍ、深さ0.48ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は京焼風椀、土師器細片数点、瓦質土器片が出土した。あと内部に40～50㎝大の河原石が数個検出された。

ＳＫ15（Fig. 9）

調査区の南方に位置する。ＳＫ14の西に接する。楕円形の平面形を有し、長径2.34ｍ、短径2.12ｍ、深さ0.48ｍを測る。埋土は灰褐色粘質土で、遺物は伊万里焼椀、京焼風椀、瓦片が数点出土している。ＳＫ14と同じく40～50㎝大の河原石が数個検出された。しかし関連性については不明である。

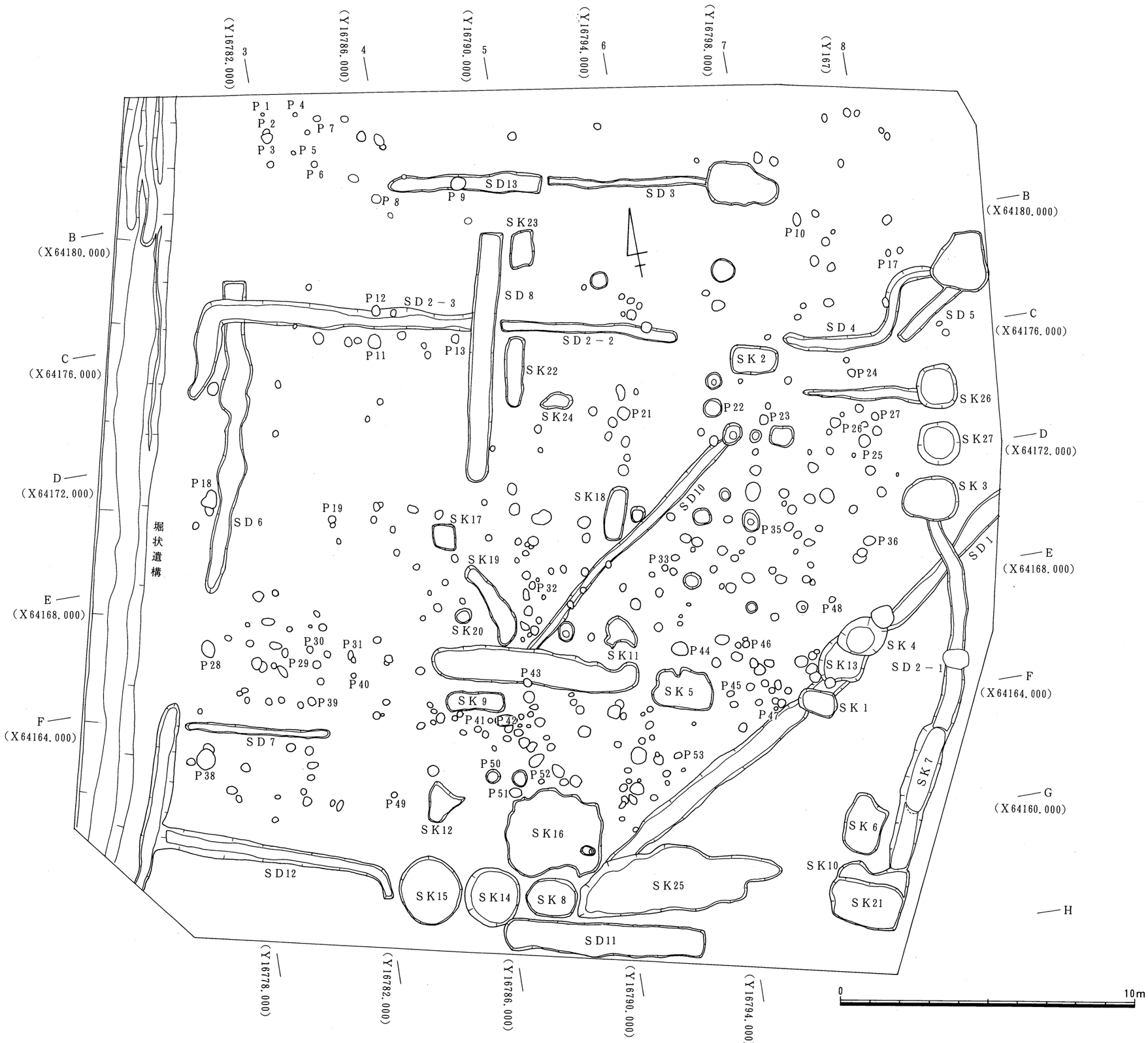
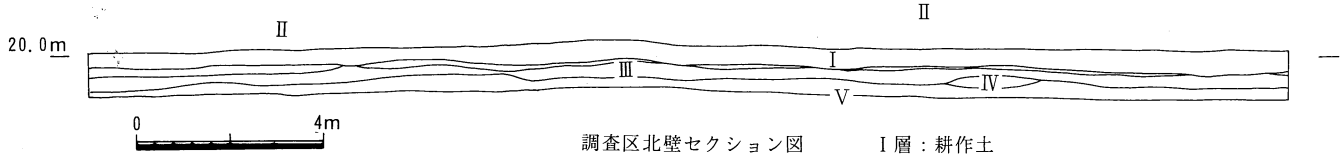
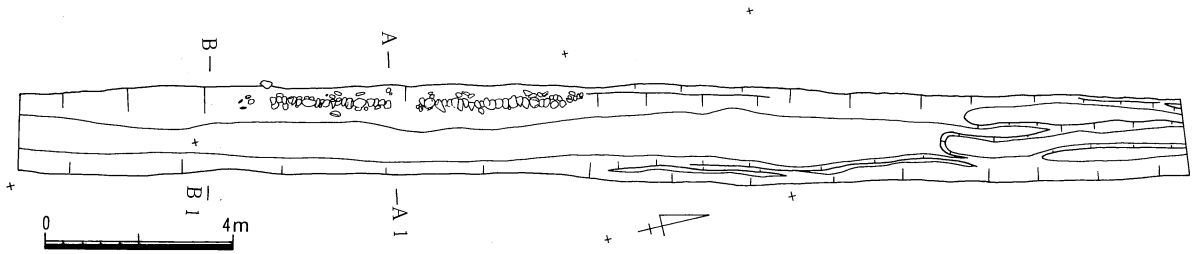


Fig.3　岩村遺跡後群１区検出遺構全体図

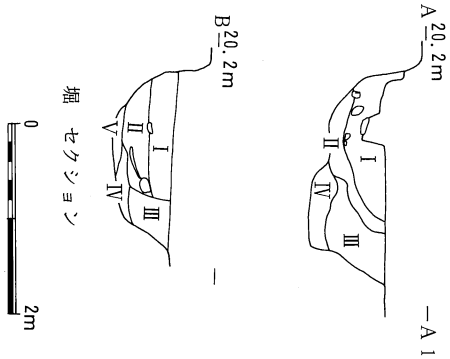


調査区北壁セクション図

Ⅰ層：耕作土
Ⅱ層：床土
Ⅲ層：茶灰黄色粘質土(中・近世遺物包含層)
Ⅳ層：灰茶色砂層



堀　平面図



堀　セクション

Ⅰ層：灰褐色粘質土層　(堀B埋土)
Ⅱ層：灰色粘質土層　(　〃　)
Ⅲ層：黄色灰色粘質土層(堀A埋土)
Ⅳ層：暗灰色粘質土層　(　〃　)
Ⅴ層：淡灰黄色粘質土層(　〃　)

Fig.4　調査区北壁セクション・堀平面・堀セクション図

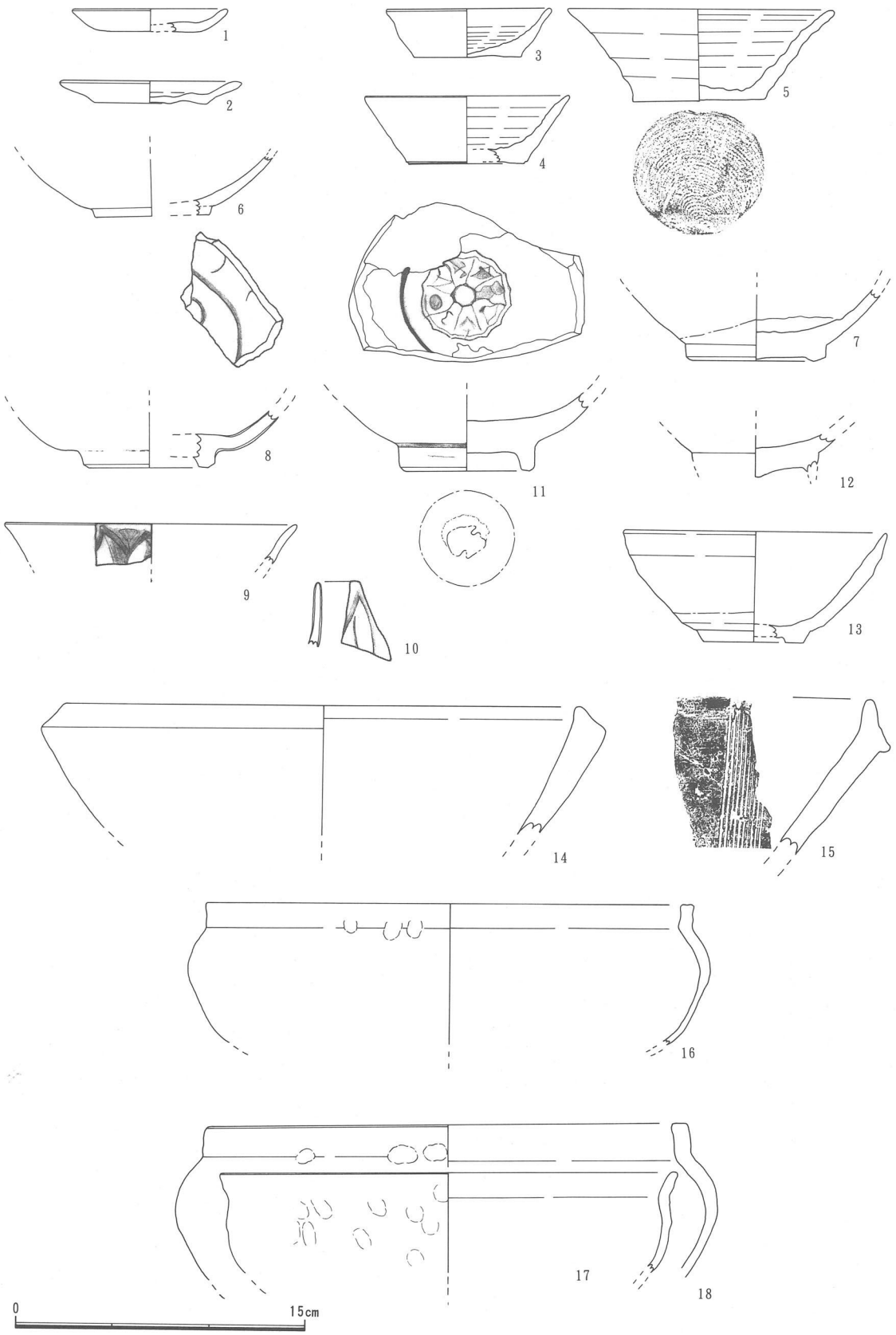


Fig.5　堀A出土遺物実測図

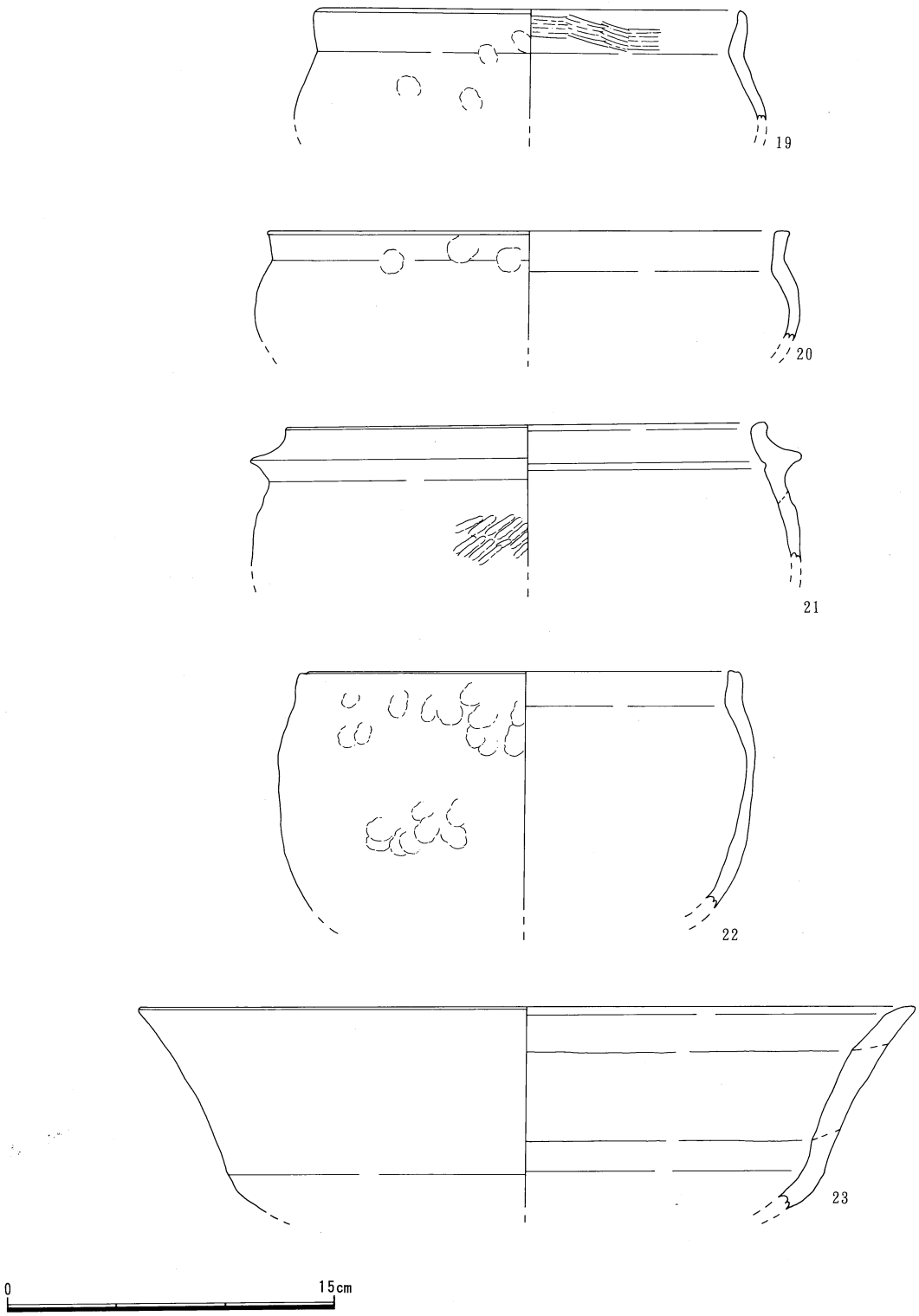


Fig.6　堀A出土遺物実測図

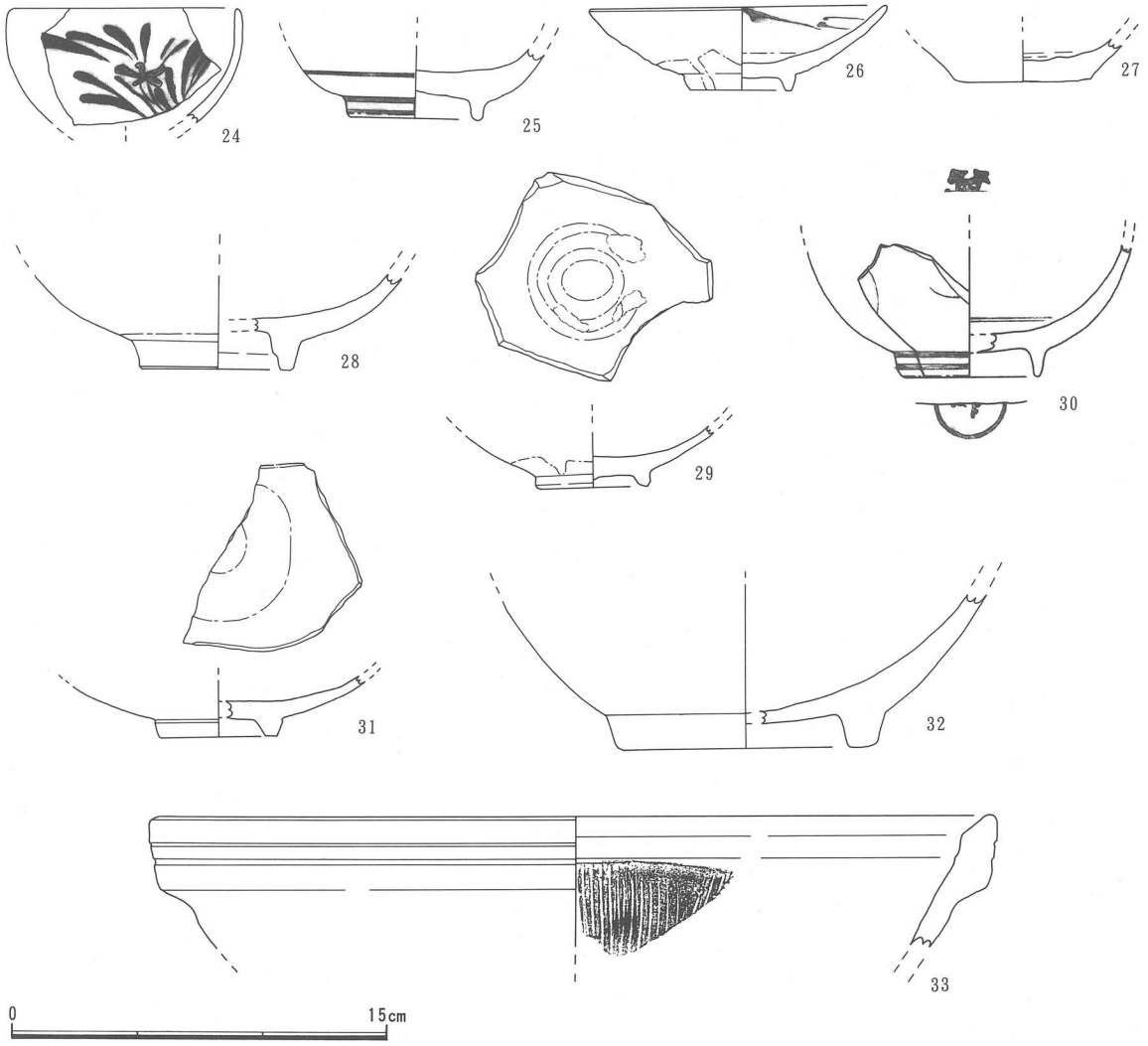


Fig.7　堀Ｂ出土遺物実測図

ＳＫ16（Fig. 9）

調査区の南方に位置する。ＳＫ８の北に位置する。不定形の平面形を有し、長径3.26ｍ、短径2.76ｍ、深さ0.30ｍを測る。床面は中央部が少しくぼんでおり、比較的と浅い土坑である。埋土は灰黄色粘質土で、遺物は伊万里焼皿、唐津焼、鉢、砂岩の石臼が１点出土している。

ＳＫ18（Fig. 9）

調査区の中央部に位置する。隅丸方形の平面形を有し、長径1.74ｍ、短径0.68ｍ、深さ0.16ｍを測る。床面は平坦で、浅い土坑である。埋土は黄灰色粘質土で、遺物は土師器細片が２点出土している。

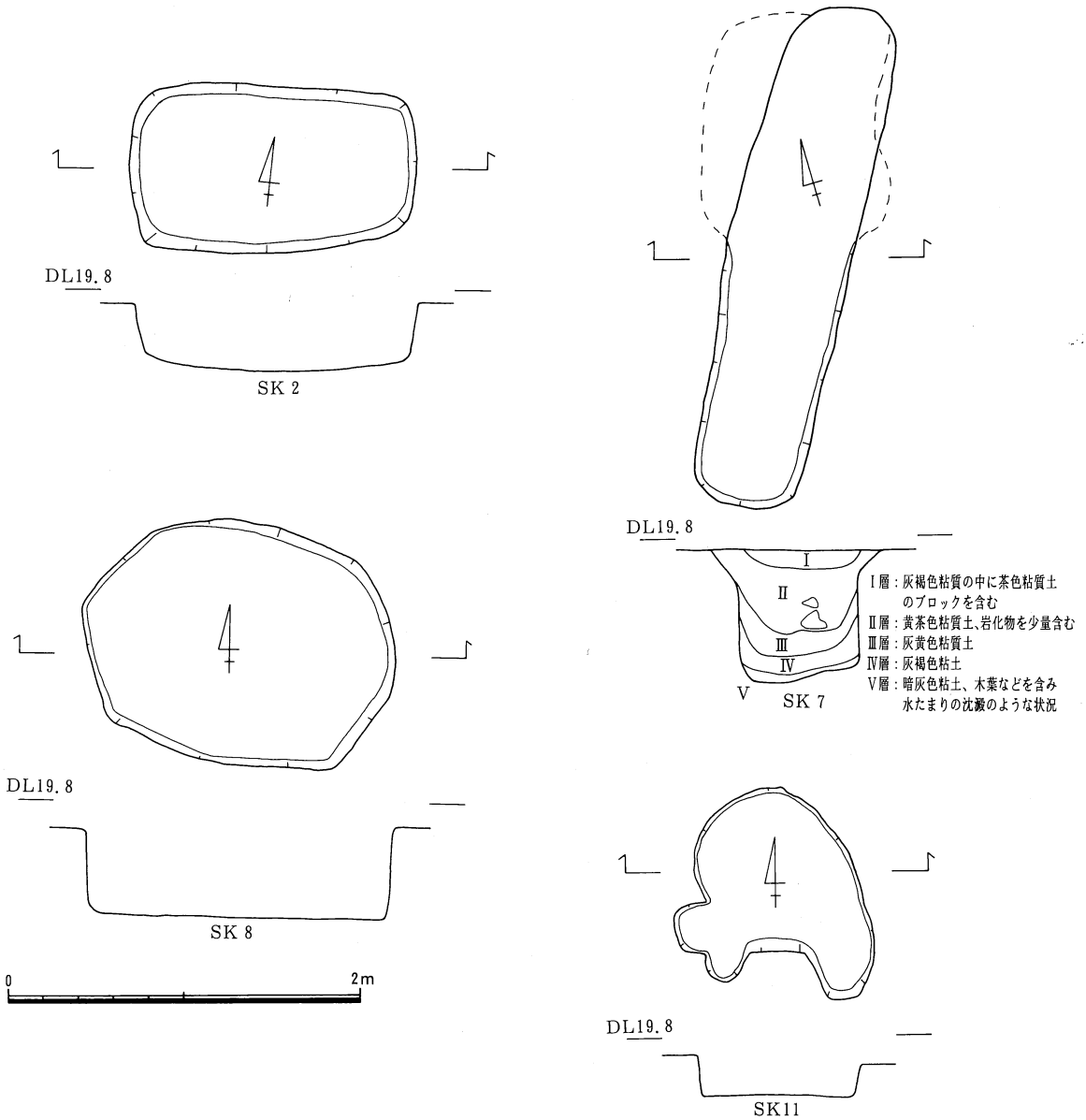


Fig.8 ＳＫ２・７・８・11平面、エレベーション、セクション図

ＳＫ20（Fig. 9）

調査区の中央部に位置する。円形の平面形を有し、長径0.56ｍ、短径0.54ｍ、深さ0.18ｍを測る。床面は平坦である。遺物は土師器杯底部が出土している。小規模な遺構である。

ＳＫ21（Fig.11・13）

調査区の東南端、ＳＤ２の南端に位置している。ＳＫ10と切りあっているが、先後関係は不明である。長径2.56ｍ、短径1.48ｍ、深さ0.44ｍを測る。北壁はＳＫ10と合わさるため、段上になっている。床面は中央部がくぼんでいる。床面に周辺を囲むように、10～20㎝程の河原石が、三段程の高さに積み上げられていた。ＳＤ２に関連する施設であると思われる。埋土は灰褐色粘質土で、出土品は、土師器小皿片多数、京焼風椀、伊万里皿（52）、土師器杯底部、土師器小皿（43，44，47，48）、瓦片10数点出土した。

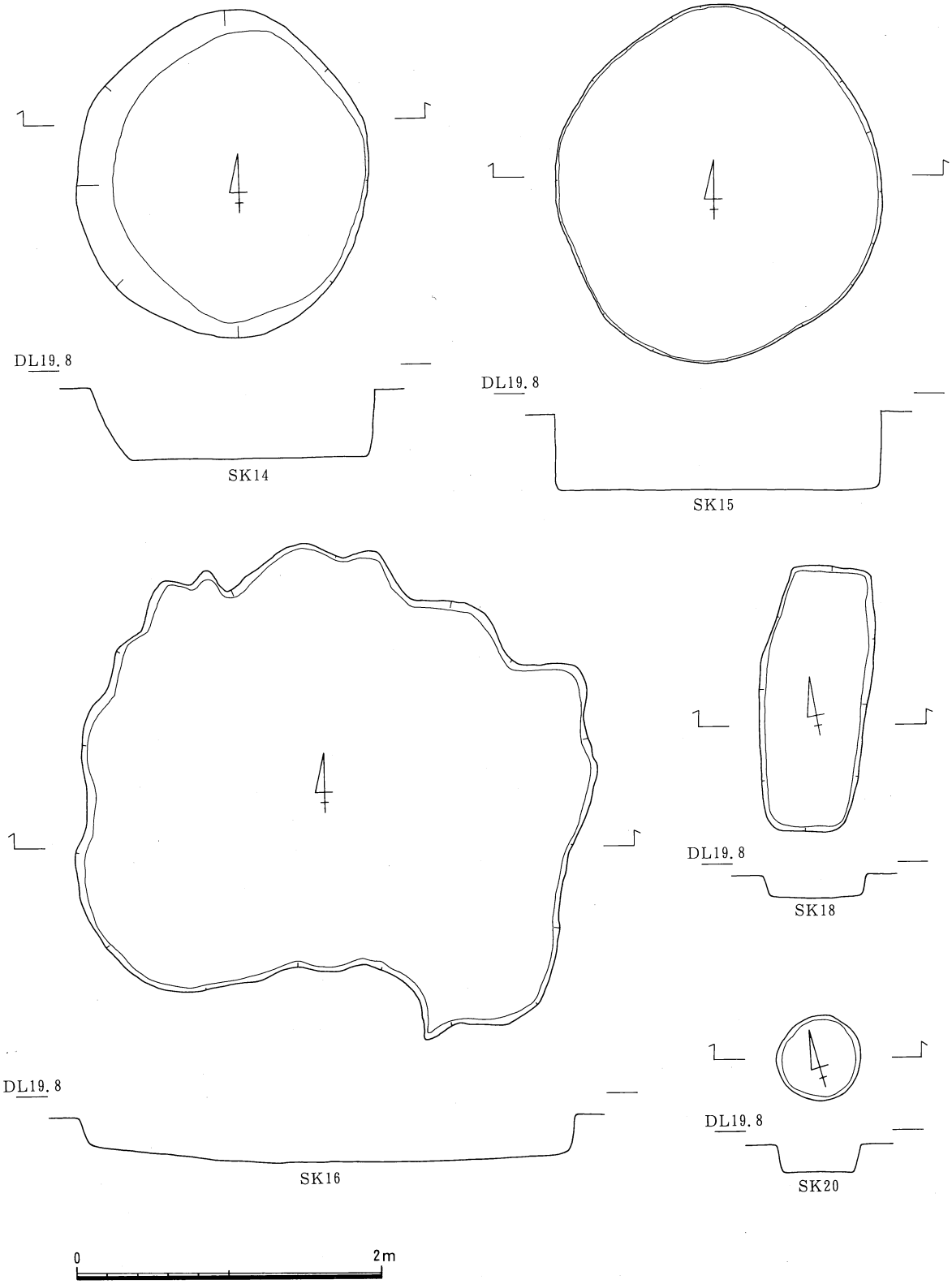


Fig.9　ＳＫ14～16・18・20平面、エレベーション図

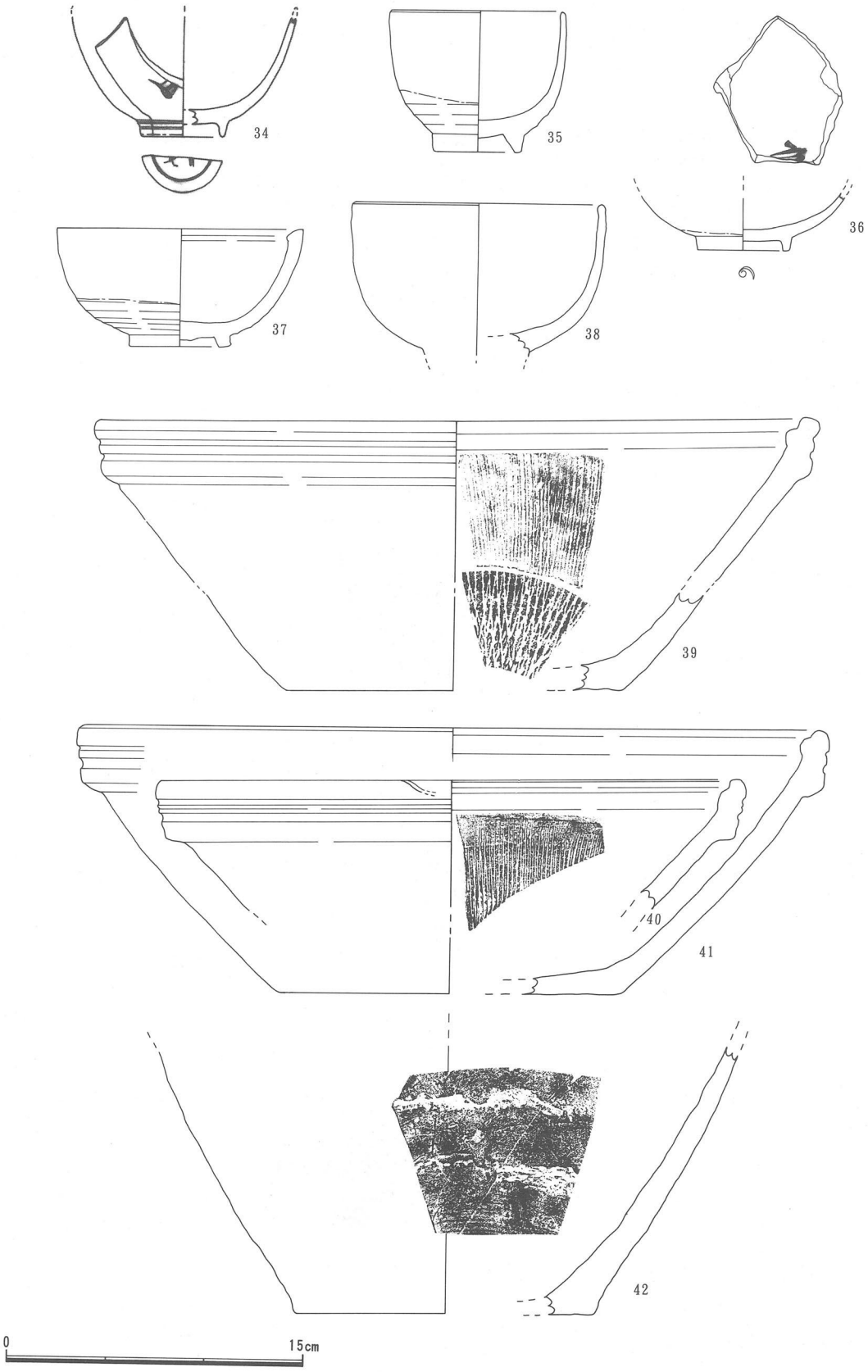


Fig.10　ＳＫ７・25出土遺物実測図

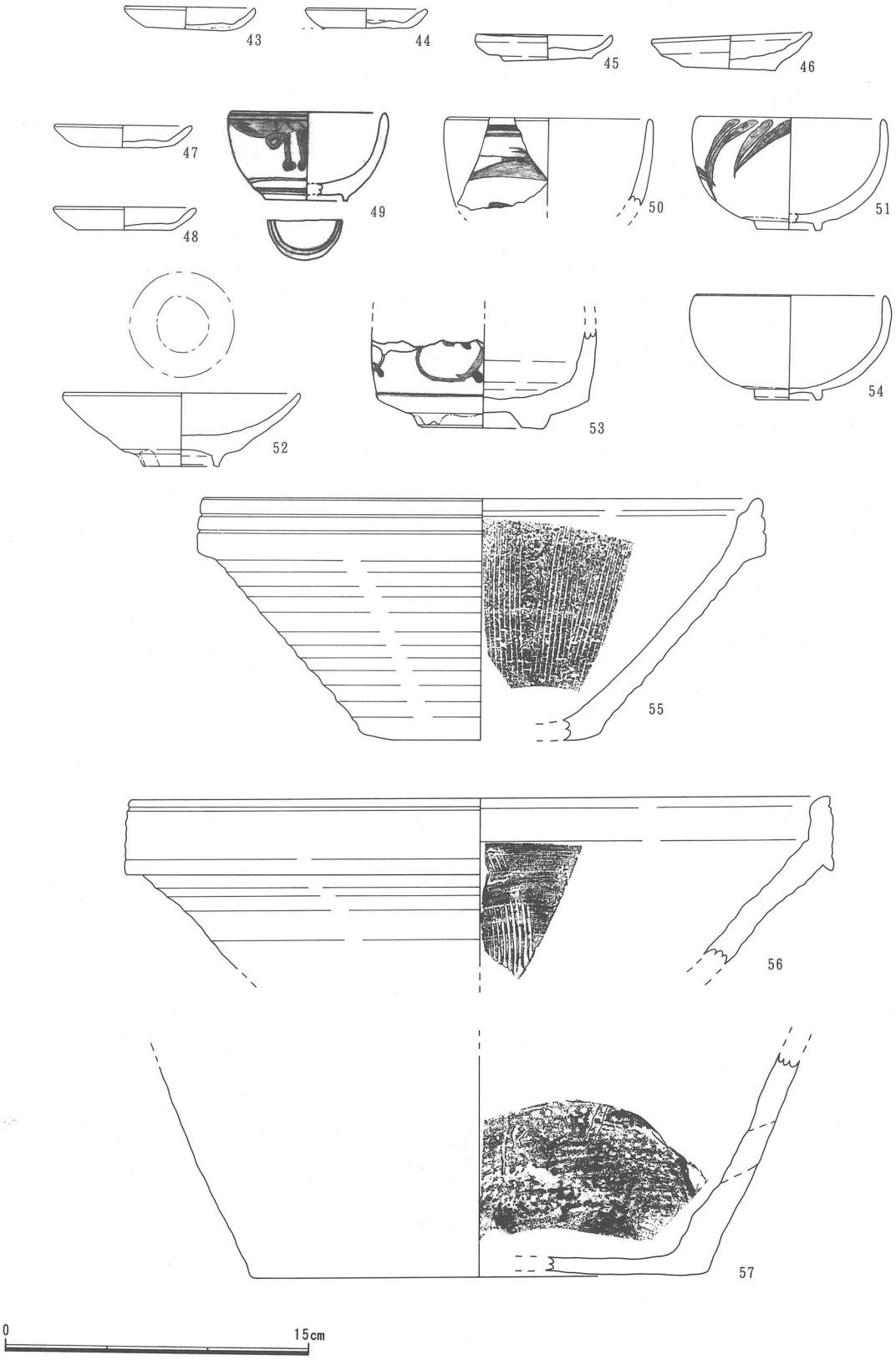


Fig.11　出土遺物実測図

ＳＫ23（Fig.23）

調査区の北方に位置する。隅丸方形の平面形を有し、長径1.26ｍ、短径0.90ｍ、深さ最深部で0.28ｍを測る。床面は西壁へ向かうほど深くなっていく。埋土は黄灰色粘質土で、遺物は、土師器細片、瓦質土器細片が数点出土した。

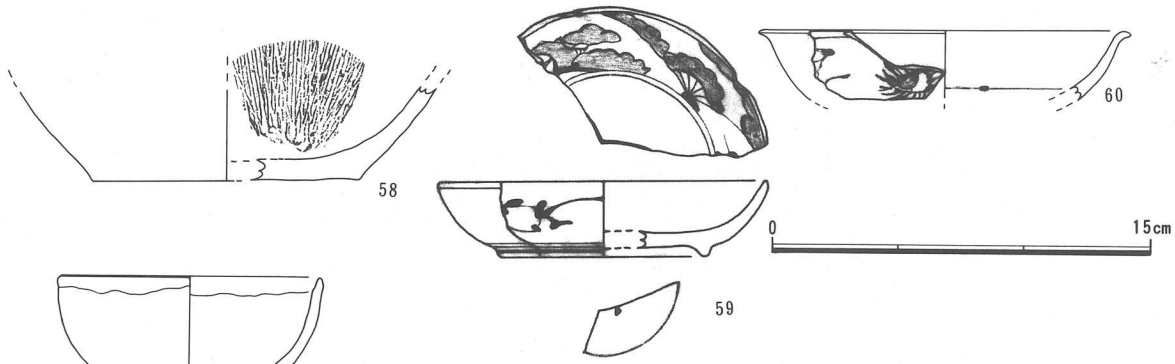


Fig.12 出土遺物実測図　ＳＤ２－１・２・３ Ｂ堀 ＳＤ２－１(61)　ＳＤ２－２(60) ＳＤ２－３(58) 堀Ｂ (59)

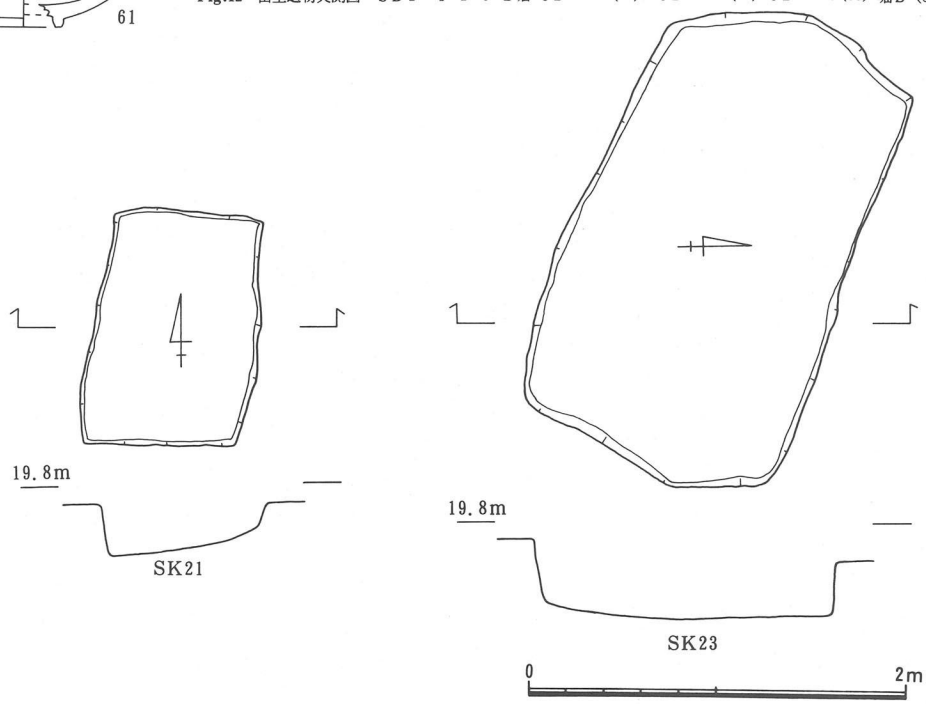


Fig.13　ＳＫ21・23平面エレベーション図

第4章　考　　察

今回行なった調査区（1区）西方隅に、南北に伸びる2条に重複している堀が検出された。この堀から出土した遺物から判断すると、15世紀代、18～19世紀という2世代に機能していた遺構であるといえるだろう。この2時期にわたる堀は、中世末、近世における屋敷地を囲む堀としての性格が考えられる。

この調査区より北東約200mの場所に岩村土居城跡があり、堀が機能していた年代とほぼ、同時期であることから、何らかの関係があったものと思われる。そこで岩村土居城と現状についての説明を付け加えておこう。

県道前浜植野線福船郵便局東方400mの地点に八幡宮の社叢がある。標高21m内外の平地であり、現状は水田でそのなかに北西隅及び東北隅部分と考えられる土塁状地形と、その外側に堀跡を踏襲したと考えられる狭長地形の水田が存在する。八幡宮は西南隅部分である。

現状地形から土塁と考えられる地形は両方ともL字状地形として残存し、北西隅が敷6.6mで、南北13.5m、東西23mである。一方、東北隅部分は敷8mで東西21m、南北13mで消滅するが、これより南については土塁敷とほぼ同幅の狭長地割の水田がそのまま南端まで62m続いている。両隅を中心と北辺のほぼ中央部は16.5mにわたって北門の如く切られている。現状地形から土塁に囲まれた平地と推考される範囲は東西60m、南北100mの広さである。

土塁の外側はそれぞれ土塁に沿った狭長地割の水田が北から東にかけては8.5m～10m幅で南限までのび、西片についても10m幅同様の狭長割水田が存在し堀の存在を考えさせる。またこの土塁に沿う狭長地割の外側にいま一つ幅5.5～7mのやや高い狭長地割が存在するが、これも土塁や堀跡などと何らかの関連がある地形かも知れない。

北西700mには包地土居、西方1.4kmには包末土居、南西1.4kmには徳弘土居が、1.1kmには立田土居がある。周辺には「城ノ内」「西ノ内」「城ノ東」「城ノ南」「土居ノ後」などのホノギも所在する。

14世紀頃の岩村氏の居城とされている。建武3年26日南北朝の戦において、北朝方に攻撃され城郭は焼き払われたと言う。

「地検長」によると塁地積を入れて約8反の本城郭と、その西に3反36代の西内付属郭よりなる複郭式である。北中央寄りにある38代の城詰の東に「三ノ塀」その西に「二ノ塀」その東に「二ノ段の諸郭があり周囲は塁豪に囲まれていたようである。

周辺の人々の話によれば、堀の東方に通称「茶がし湯」という所があり、ここは昔殿様が茶を飲んで休まれたところと伝えられている。

遺物観察表

（第1表）

挿図番号	遺構番号	器種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特徴	備考
1	堀（下層）	皿	7.8 1.25 — 5.2	淡橙色堅緻な胎土。0.1mm～0.5mmの砂粒を含む。ほぼ平らな底部から、体部は斜め上方へのび、端部を丸く仕上げる。	土師小皿 内外面の一部煤ける。
2	〃	〃	9.6 1.2 — 6.0	濃淡橙色堅緻な胎土。細かな砂粒を含む。体部は内湾気味に上がり、端部は丸く仕上がる。	〃
3	〃	坏	8.6 2.6 — 5.6	淡橙色堅緻な胎土。細かな砂粒を含む。体部は上外方へのび、端部を丸く仕上げる。外面底部は糸切り。	土師坏
4	〃		10.6 3.5 — 5.9	黄茶色堅緻な胎土。外面横ナデ。内面ロクロ目顕著。外面底部は回転糸切り。	
5	〃	椀	13.65 4.7 — 6.8	淡橙色堅緻な胎土。内外面共に、ロクロ目顕著。外面底部は回転糸切り。	土師器
6	〃	坏	— (3.0) — 6.0	灰白色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。高台を呈する。外面底部は回転糸切り。	須恵器
7	堀（上層）		— (4.7) — 7.2	灰褐色堅緻な胎土。外面横ナデ。釉調は白濁色。内面全面施釉削り出し高台。内面に線有り。	12C頃の白磁
8	堀（下層）	碗	— (2.8) — 6.3	縁褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内外面全面施釉。多数ヒビ割れが見える。削り出し高台。	青磁
9	堀		15.0 (2.1) — —	縁褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内外面全面施釉。口縁部は、端部を丸く仕上げる。	
10	堀（Ⅰ層）			縁白色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内外面全面施釉。	青磁
11	堀（下層）		— (4.0) — 6.5	縁褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内外面全面施釉。内面底部に文様有り。内面に多数のヒビ割れが見える。削り出し高台。	〃
12	堀（Ⅰ層）		— (2.2) — —	縁白色堅緻な胎土。内外面共に全面施釉。削り出し高台。	〃
13	堀（下層）	天目茶椀	13.4 5.7 — 5.2	暗茶黒褐色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。内面全面に鉄釉を施し、外面⅔に鉄釉を施している。削り出し高台。	天目茶椀
14	〃	こね鉢	26.4 (6.6) — —	茶黄色やや粗い胎土。細かな砂粒を多く含む。口縁部で少しの内椀している。	土師器
15	〃	擂鉢		外面は灰褐色。内面は灰橙色。条線は10本単位である。口縁部は内と外とに張り出している。内外面共に横ナデ。	備前
16	〃	鍋	25.0 (7.3) — —	黒褐色な胎土で堅緻。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面共に横ナデ。	瓦器
17	〃	〃	24.0 5.2 — —	内面淡灰色。外面黒褐色。堅緻な胎土。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面共に横ナデ。	〃
18	堀（Ⅰ層）	〃	24.6 (8.0) — —	灰黄色な胎土で堅緻。内外面共に横ナデ。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線的に立ち上がる。内外面共にすすけた跡がある。	〃

遺　物　観　察　表

（第２表）

挿図番号	遺構番号	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
19	堀 （下層）	鍋	19.0 (5.0) — —	外面黒灰色、内面灰黄色な胎土で堅緻。内外面共に横ナデ。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	瓦器
20	〃	〃	23.6 (5.0) — —	灰黄色で堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反している。内外面の一部にすすけた跡がある。	〃
21	堀 （Ｉ層）	〃	21.6 (6.4) — —	茶黄色で堅緻な胎土。細かな砂粒を多く含む。内外面共に横ナデ。体部は内湾気味に立ち上がり、ツバは断面三角で強く張り出している。外面のツバ以下は、全体的にすすけている。	土師器
22	堀 （下層）	〃	19.6 (10.9) — —	灰色で堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は直線に立ち上がっている。外面の一部にすすけた跡がある。	瓦器
23	堀 （埋土）	〃	35.0 (9.2) — —	淡橙色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は、わずかに外面しており、端部は丸くおさめる。外面は全面的にすすけている。	土師器
24	堀 （床面）	椀	8.8 (4.6) — —	灰白色堅緻な胎土。飴色の釉を施釉していて、外面のそのうえに上絵付をほどこしている。	
25	堀 （上層）	椀	— (2.9) — 5.2	縁灰色やや粗い胎土。内外面全面に白濁色の釉を施釉。内外面共に貫入あり。削り出し高台。高台外部に2本、外体部低部に1本の、くすんだ藍色の圏線がある。	
26	〃		10.8 3.4 — 4.1	灰白色堅緻な胎土。内外面共に白濁色の釉を施釉。体部外面露胎部はオレンジ色に発色。内面は釉を蛇ノ目状に削っている。内面上方は、薄い呉須による文様が入っている。	白磁
27	堀 （Ｉ層）	坏	— (1.7) — 5.4	淡橙色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。外面底部は糸切り。	土師器
28	堀 （上層）	皿	— (3.9) — 6.2	黄褐色堅緻な胎土。内外面共に飴色の釉を施釉している。内外面共に蛇ノ目状に釉を削りとっている。削り出し高台。	
29	〃		— (2.3) (4.4)	内面縁灰色、外面淡黄白色の堅緻な胎土。内面に縁灰色の釉を施釉している。体部外面露胎部に飴色の釉を施釉している。内面は釉を蛇ノ目状に削っている。削り出し高台。	
30	堀 （上、下層）		— (5.2) — 5.6	淡縁白色堅緻な胎土。内外面全面に飴色の釉を施釉。高台外部に２本、外体部底部に１本の濃い藍色の圏線がある。内面低部に薄い呉須による圏線と文様が入っている。	
31	堀 （下層）	椀		縁白色堅緻な胎土。内外面共に白濁色の釉を施釉している。内面は蛇ノ目状に釉を削りとっている。体部外面露胎部は一部釉がかかっていない。削り出し高台。	
32	堀 （Ｉ層）	こね鉢	— (6.0) — 10.0	外面黒茶褐色、内面淡茶色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ。削り出し高台。	備前
33	堀 （上層）	擂鉢	33.0 (5.3) — —	赤茶色堅緻な胎土。口縁部内面段がある。口縁部外面に2本の浅い凹線がある。	〃
34	ＳＫ25		— (6.1) — 4.0	灰白色堅緻な胎土。内外面全面に、白色の釉を施釉している。高台外部に2本、外体部に1本の薄い藍色の圏線がある。外面に藍色で絵が書かれている。削り出し高台。	
35	〃	天目茶椀	8.3 7.1 — 4.4	黒褐色やや粗い胎土。内面全面、外面⅔程に飴色の釉を施釉。外面露胎部はオレンジ色に発色。削り出し高台。	
36	〃		— (2.8) — 4.6	淡黄灰色堅緻な胎土。内面全面、外面½程に白濁色の釉を施釉。外面露胎部ははだ色に発色。削り出し高台。	陶器

遺　物　観　察　表

（第３表）

挿図番号	遺構番号	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
37	ＳＫ25		12.2 4.9 — 5.0	黄白色やや粗い胎土。透明度の強い、薄い緑色の釉を内面全面外面½に施釉。全面に貫入あり。胎土は砂粒を多く含む。外面露胎部には、ノミで削り跡が認められる。底部外面兜巾がみられる。	瀬戸系
38	〃		12.2 (7.7) — —	黄土色堅緻な胎土。飴色の釉を内外面全面に施釉している。内外面全面に貫入あり。	陶器
39	ＳＫ７	擂鉢	35.0 13.5 — 16.6	赤茶色やや粗い胎土。口縁部外面に2本の浅い凹線がある。口縁部内面に少し段がある。比較的荒い条線がはしる。細かい砂粒が多数まじる。	備前
40	〃	〃	29.0 (6.5) — —	黄茶色やや粗い胎土。細かい砂粒が多数まじる。口縁部外面に２本の浅い凹線が入る。口縁部内面に少し段がある。	〃
41	ＳＫ25		36.7 13.4 — 17.3	赤茶褐色やや粗い胎土。細かい砂粒が多数まじる。口縁部外面に２本の浅い凹線が入る。口縁部内面に少し段がある。比較的荒い条線がはしる。	
42	ＳＫ25	甕	— (13.5) — 15.0	外面灰褐色、内面灰色の堅緻な胎土。内面格目のたたき痕が見られる。粘土ヒモの跡が内面に見られる。内外面たたき調整。	
43	ＳＫ21	皿	6.4 2.2 — 4.4	黄茶色堅緻な胎土。内外共に横ナデ調整。口縁部に少しコゲ跡が内外面共に見られる。細かい砂粒がまじる。	土師小皿
44	〃	〃	6.0 1.0 — 4.6	淡橙色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ調整。底部糸切り。	〃
45	ＳＫ７	〃	6.2 1.4 — 4.3	淡橙色堅緻な胎土。内外面共に横ナデ調整。底部糸切り。内外面口縁部の一部にはげしい焼け跡が見られる。	〃
46	〃	〃	— 16.0 — 4.6	淡橙色堅緻な胎土。細かな砂粒がまじる。底部糸切り。内外面共に横ナデ調整。口縁部の一部にはげしい焼け跡あり。	〃
47	ＳＫ２１	〃	6.7 1.2 — 4.0	〃	〃
48	〃	〃	7.2 1.1 — 4.6	茶黄色堅緻な胎土。細かな砂粒がまじる。底部糸切り。内外面共に横ナデ調整。	〃
49	ＳＫ７	杯	7.6 4.3 — 4.0	灰白色堅緻な胎土。白濁色の釉を内外面共に全面施釉。外面呉須は高台脇内外面に２条の圏線、外胎部下部に１条の圏線があり、外面口縁部下に主文様を描く。	陶器、染め付
50	〃	椀	10.0 (4.3) — —	灰白色堅緻な胎土。貫入が内外面共に見られる。内外面全面に白濁色の釉を施釉。外面呉須は、口縁部外面下に主文様を描く。	伊万里焼 陶胎染付 18世紀
51	〃	〃	9.0 5.5 — 3.2	縁灰色堅緻な胎土。内外面共に貫入が見られる。白濁色の釉を内外面に施釉。外面高台は蛇ノ目に削りとっている。外面釉の上に上絵付をほどこしている。削り出し高台。	陶器、上絵付
52	ＳＫ21	〃	11.6 3.7 — 3.8	外面白灰色、内面灰白色で堅緻な胎土。内面を蛇ノ目状に削っている。内外面共に飴色の釉を施釉している。体部外面露胎部は灰色に発光している。削り出し高台。	白磁
53	ＳＫ７	〃	— (5.0) — 6.3	茶褐色少し粗い胎土。外面に灰白色の釉を施釉している。外面呉須はあせた藍色。外面貫入が見られる。内面と高台部は茶褐色に発光。	染め付
54	〃	〃	9.2 5.1 — 3.2	縁灰色堅緻な胎土。内外面共に白濁色の釉を施釉。内外面共に横ナデ。	尾戸焼

遺　物　観　察　表

（第４表）

挿図番号	遺構番号	器　種	法量（cm） 口径 器高 胴径 底径	特　　徴	備　　考
55	ＳＫ７	擂鉢	27.2 11.9 — 11.8	外面体部は赤茶色、内面、内外面口縁部は黒赤色やや粗い胎土。細かな砂粒を多く含む。口縁部は外面に２本の浅い凹線がある。口縁部内面に弱い段がある。内面の条線は８本単位である。	備前
56	〃	〃	34.0 (8.2) — —	黒赤色堅緻な胎土。口縁部は外側に弱い段があり、内側に大きく突出する。内面の条線は8本単位である。	〃
57	〃	こね鉢	— (10.8) — 22.4	黒茶色やや粗い胎土。内面格目のたたき痕が見られる。粘土ヒモの跡が内面に見られる。内外面たたき調整。	〃
58	ＳＤ－２		— (3.6) — 10.6	茶褐色やや粗い胎土。底部糸切り。比較的荒い条線がはしる。	
59	堀 （埋土）	皿	13.0 3.0 — 8.1	灰白色堅緻な胎土。内外面全面に飴明の釉を施釉。外面にボタン唐草文様を描く。	輸入陶磁器
60	ＳＤ－２	〃	14.6 (2.7) — —	縁灰色堅緻な胎土。内外面全面に白色の釉を施釉。体部内面に松と雲の文様を描く。内面見込部外面に２条の圏線。外体にコンニャク般が見られる。呉須はややあせた藍色。	伊万里
61	〃	椀	10.2 5.2 — 3.0	淡黄灰色堅緻な胎土。内外面共に飴色の釉を施釉。	

報告書抄録

ふ り が な	いわむら　　ぐん
書　　名	岩村　遺　跡　群
副　書　名	岩村地区県営圃場整備事業に伴う岩村遺跡群発掘調査概要
巻　　次	1
シ リ ー ズ 名	高知県南国市教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	第8集
編 著 者 名	坂本芳史　　武市義浩
編 集 機 関	南国市教育委員会
所　在　地	高知県南国市大埇２３０１番地
発 行 年 月 日	１９９６　３／３１

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いわむらいせきぐん 岩村遺跡群	南国市 ふくふね 福船	204	040242	33° 35′	133° 30′	平成7年 9月29日 平成8年 2月7日	2,345	県営圃場 整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
岩村遺跡群	集落跡	弥生 中世 近世	堀 土坑 柱穴	弥生土器 土師質土器 近世陶磁器	

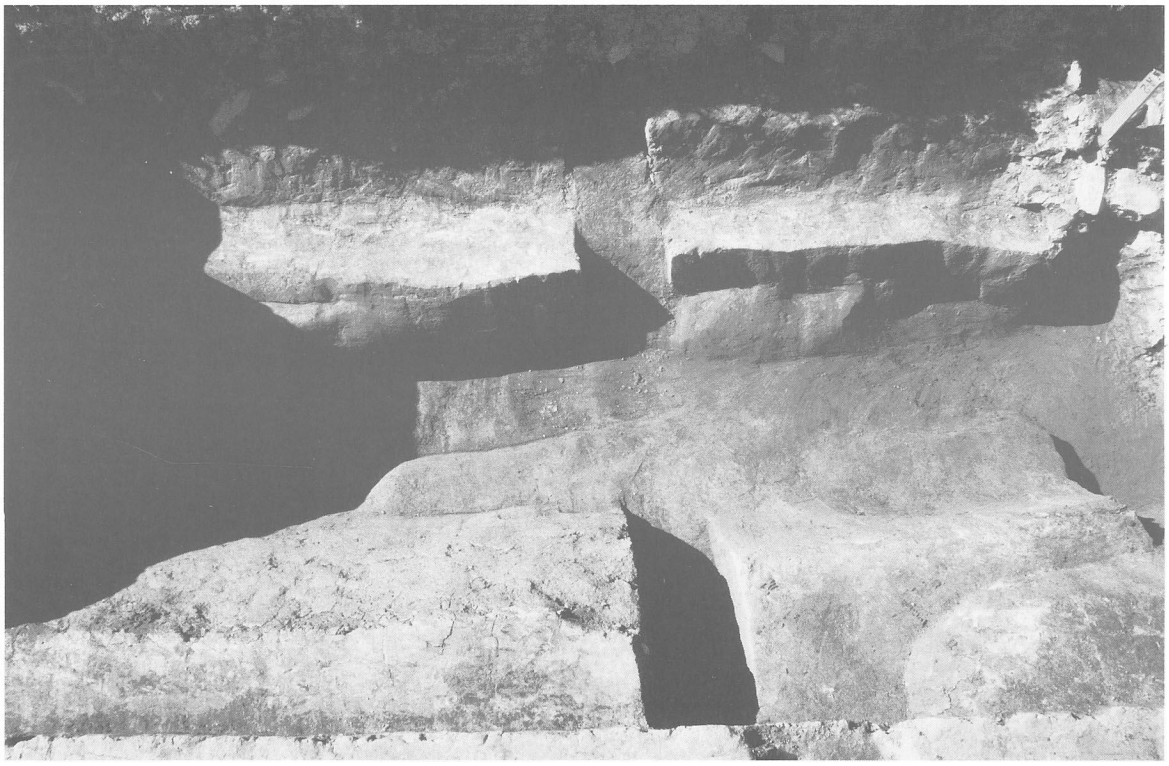
図　　版

調査前全景（南から）

同上（北西から）

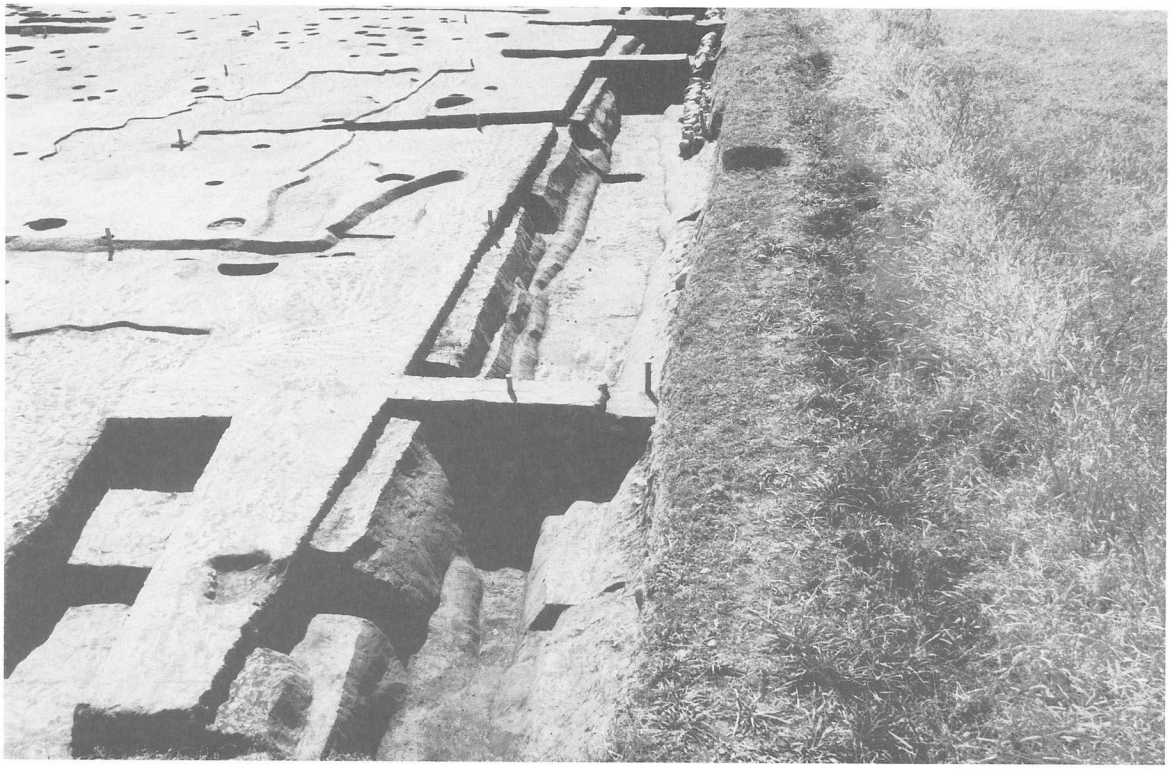
ＳＫ７

同上　壁溝セクション



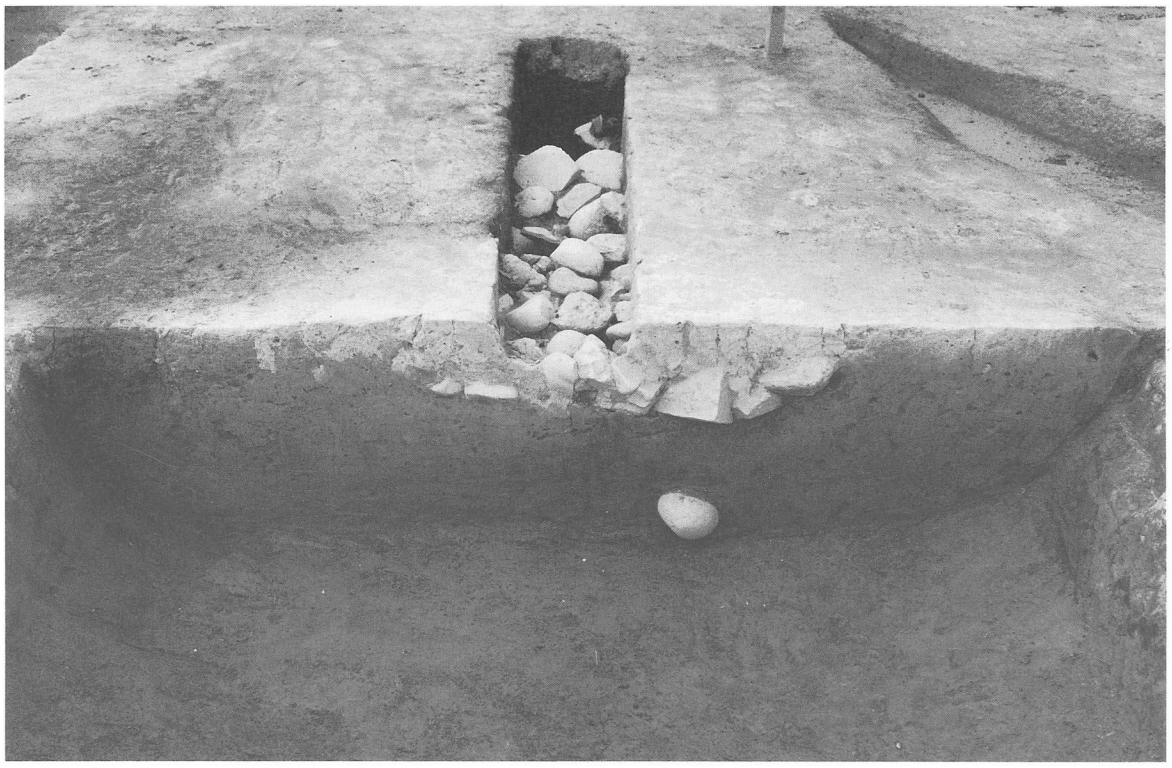
堀　完堀状況

堀　中央バンク南壁



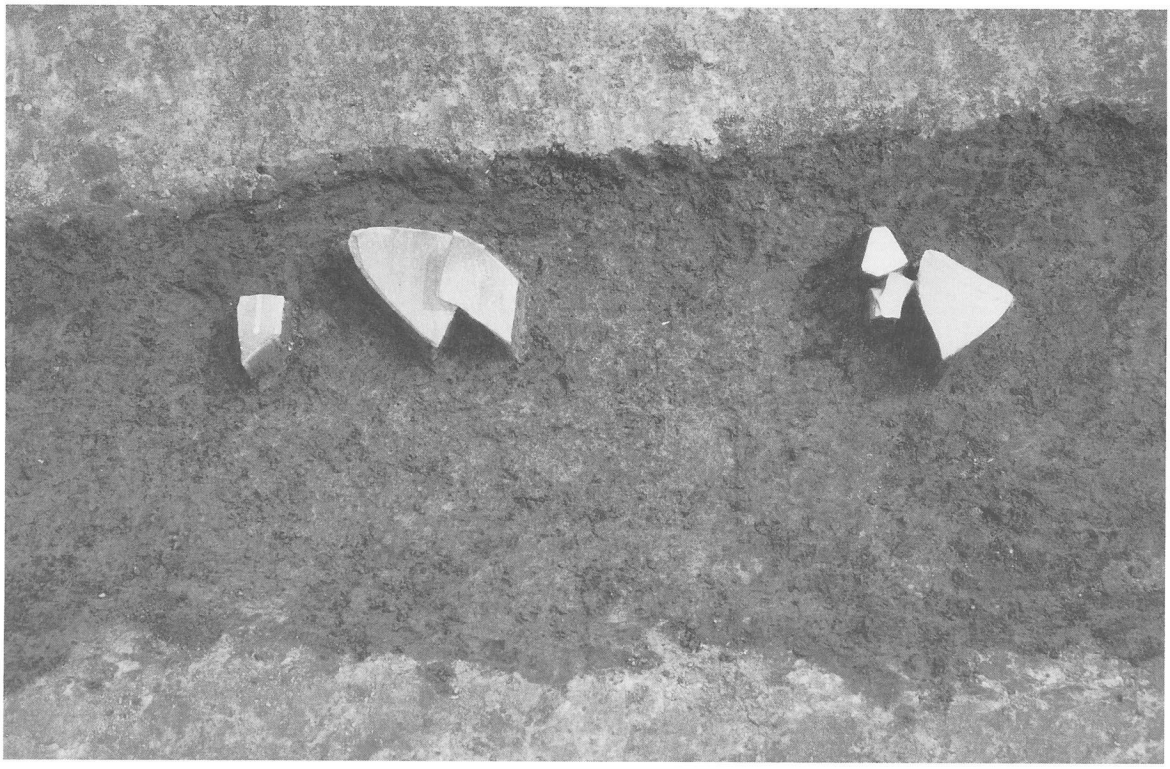
堀　全景（北から）

ＳＫ14　完堀状況

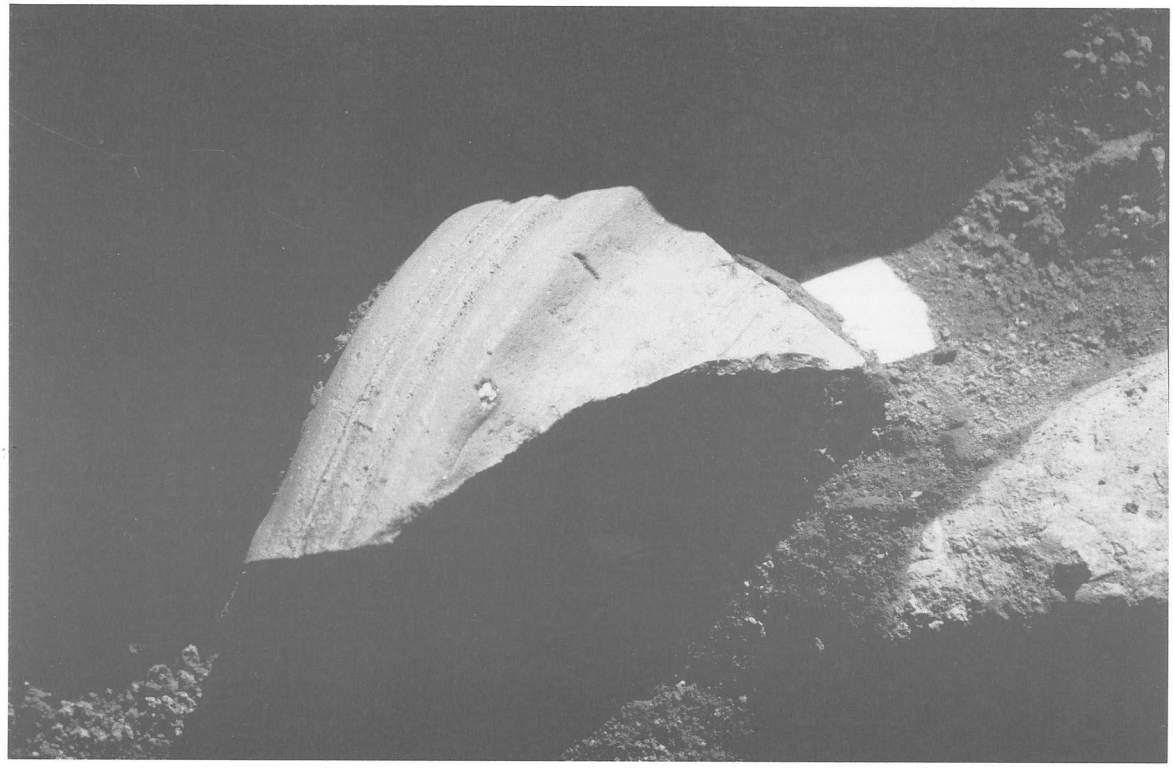


ＳＫ25　西壁セクション

ＳＫ21　完堀状況

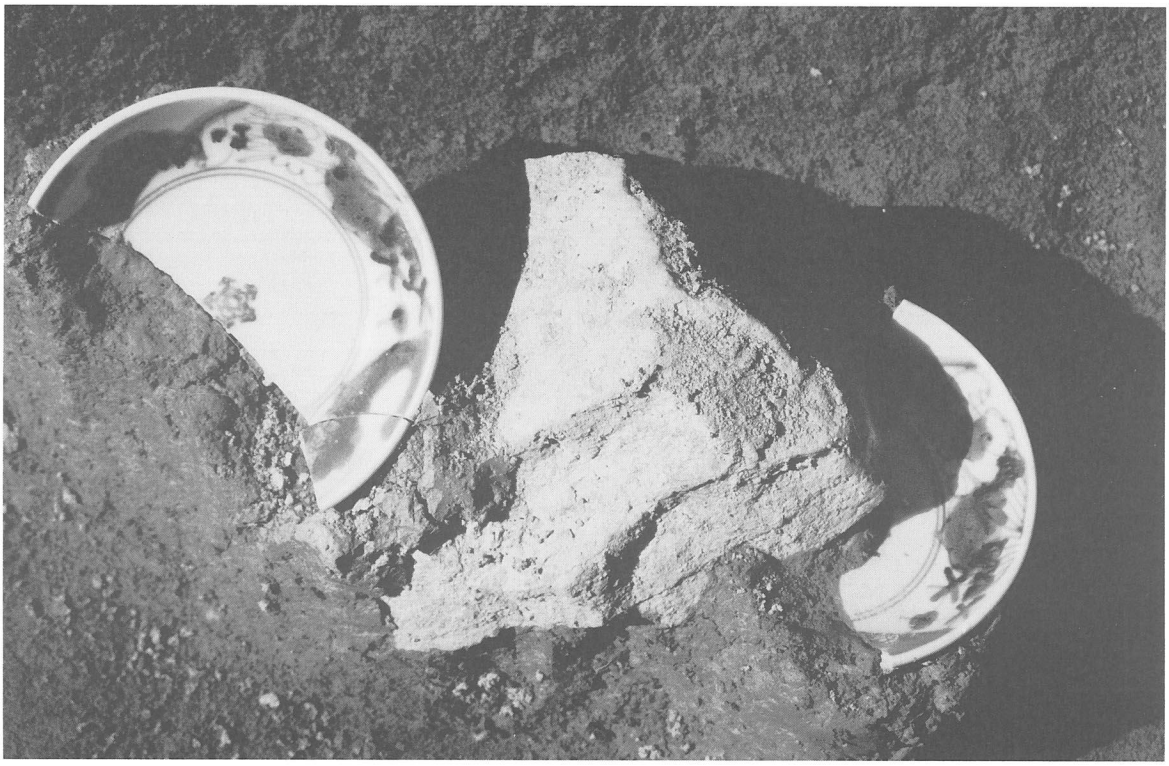


ＳＤ２－１　遺物出土状況



ＳＫ７　遺物出土状況

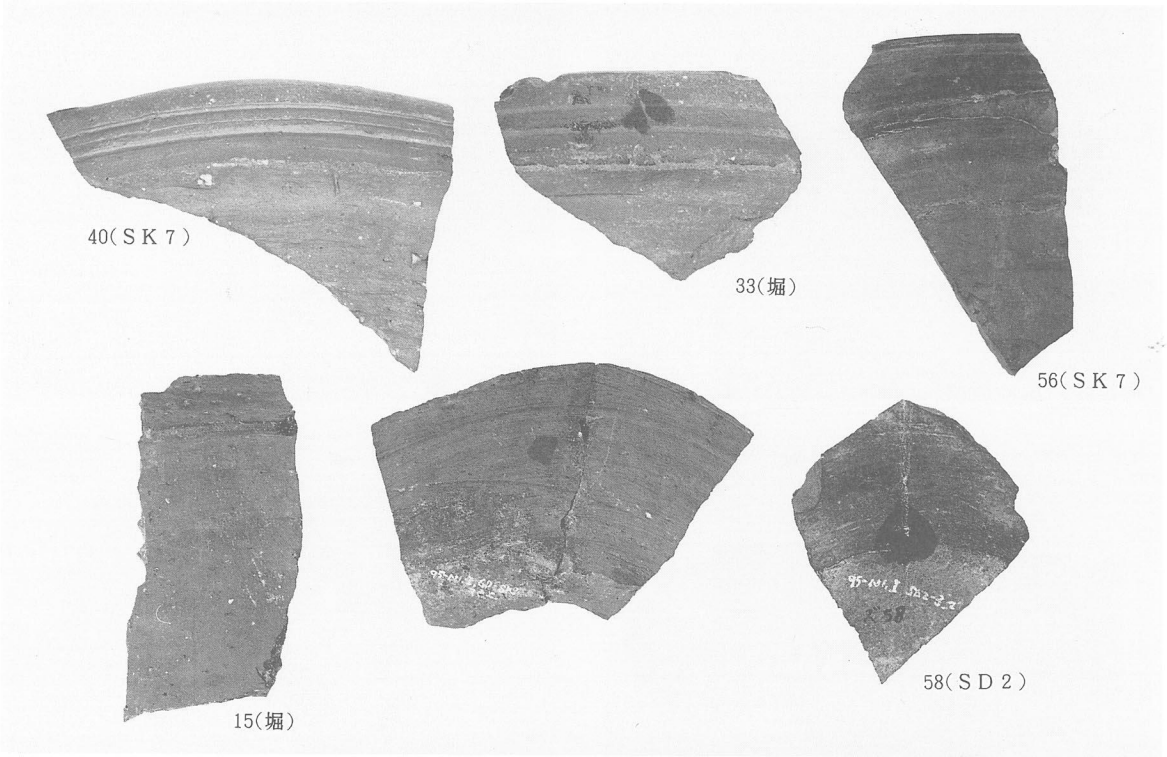
ＳＤ14　遺物出土状況

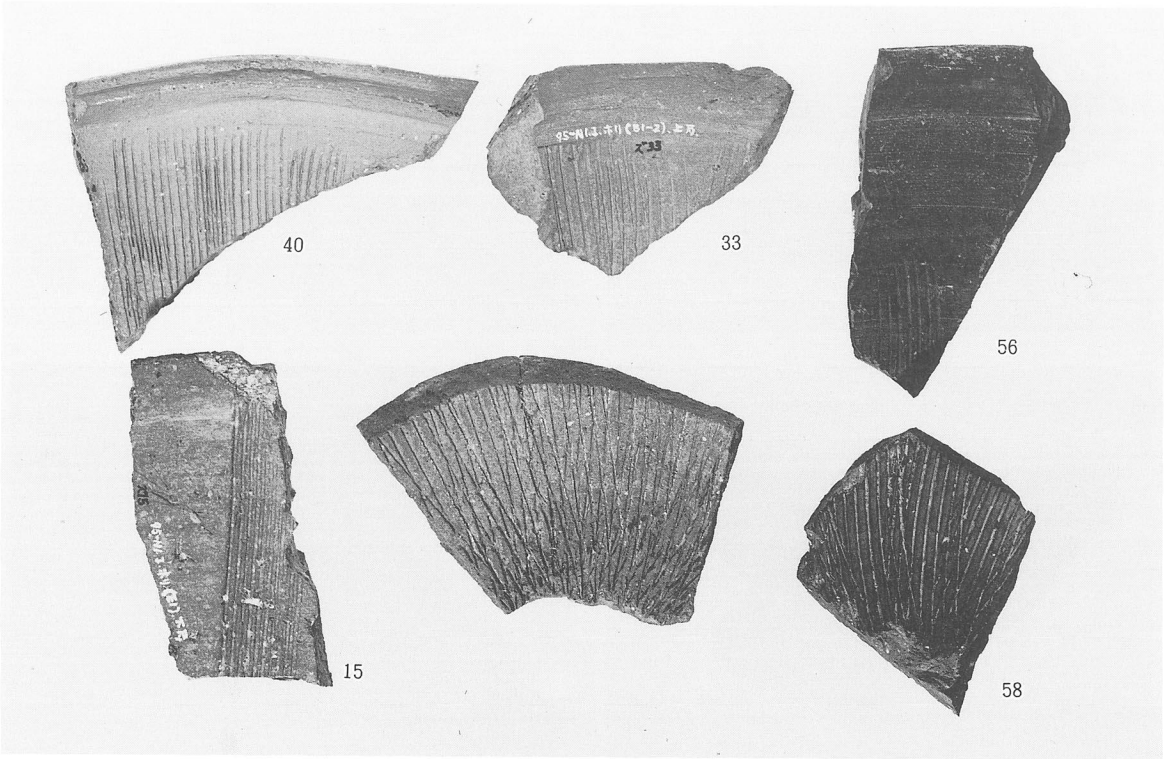


同上　拡大

発掘風景

同上

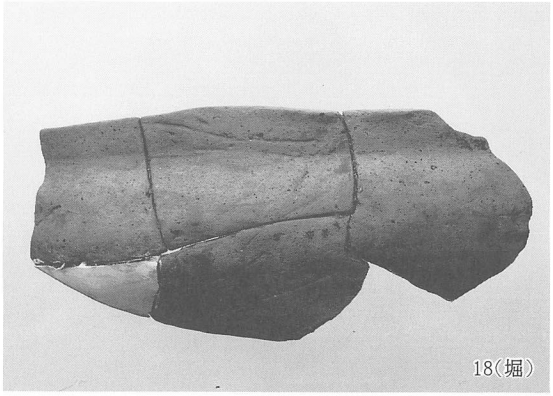


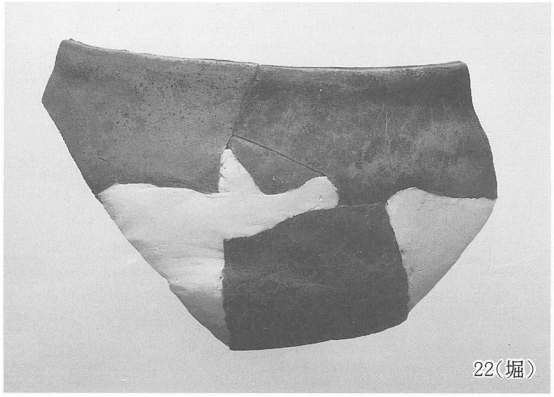


堀　SK7・SD2出土遺物(同上裏面)

36(SK25)

11(堀)


18(堀)


22(堀)

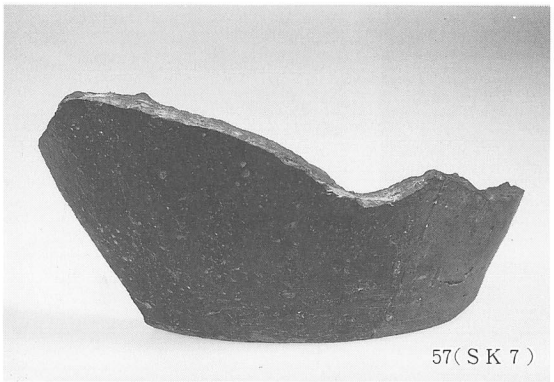
53(SK7)

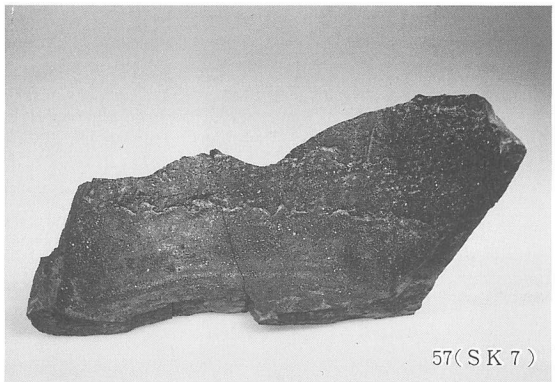
61(SD2－1)

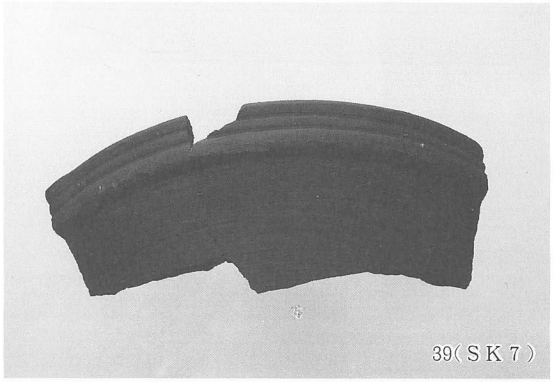
55(SK7)

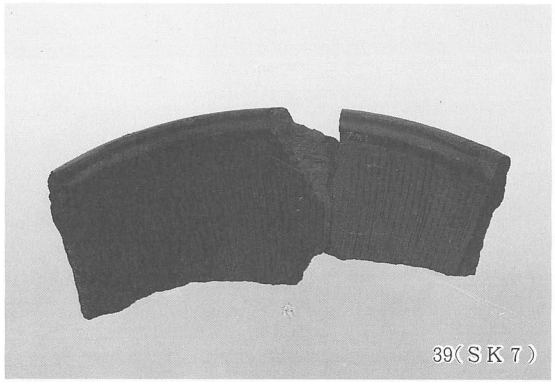
55(SK7)

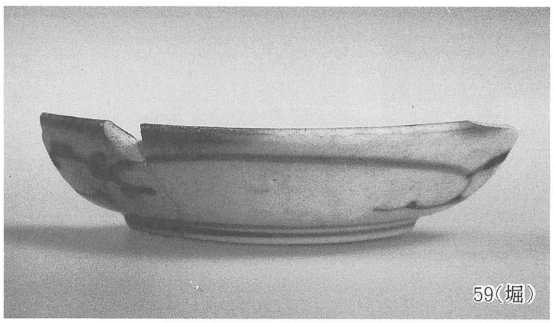
堀　SK7・25　SD2出土遺物

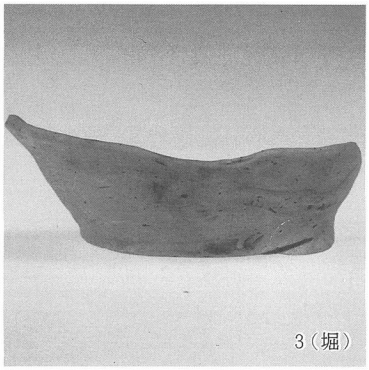


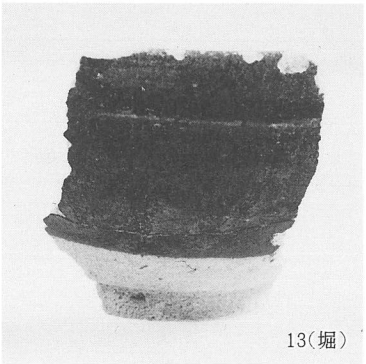




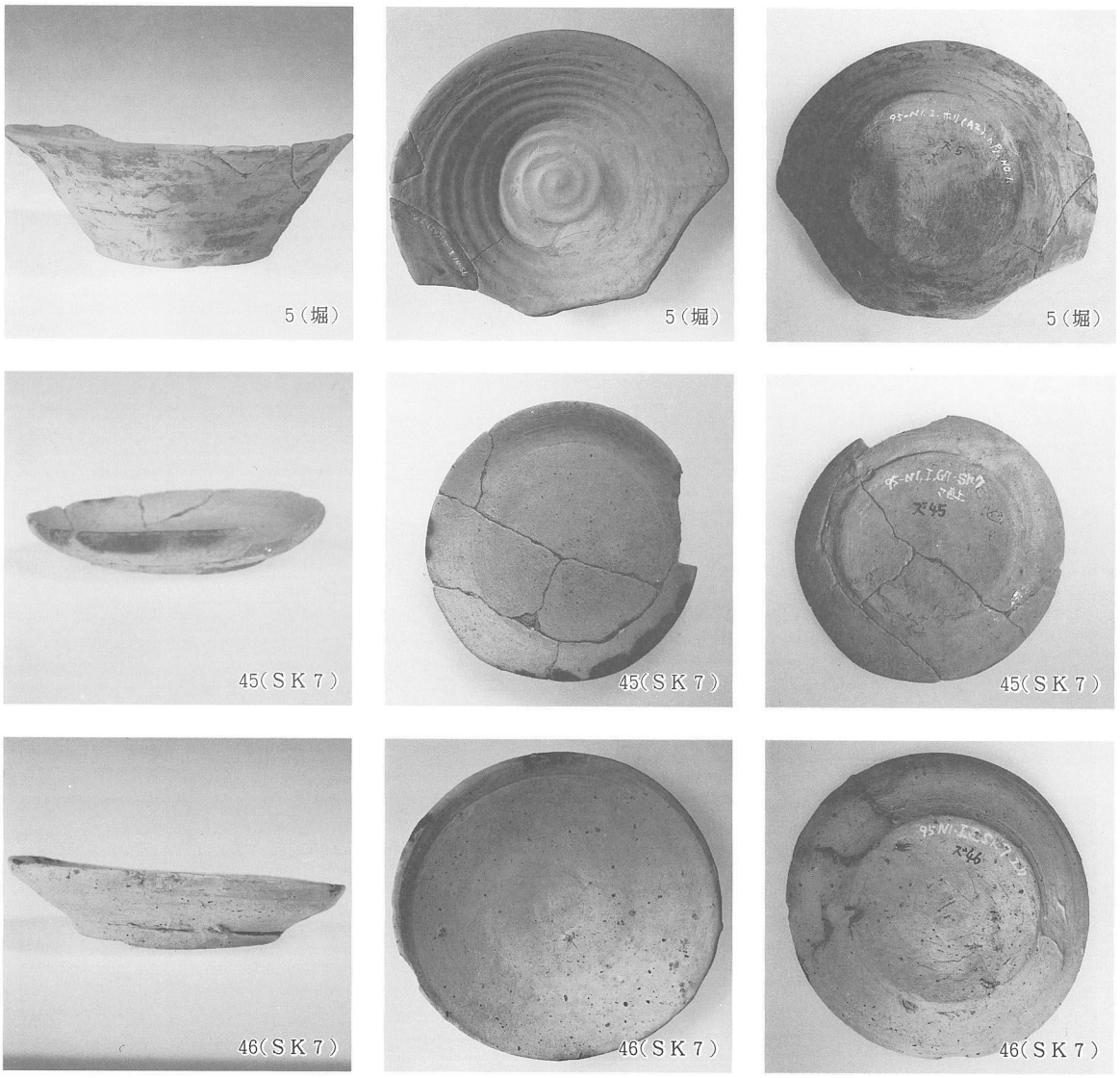








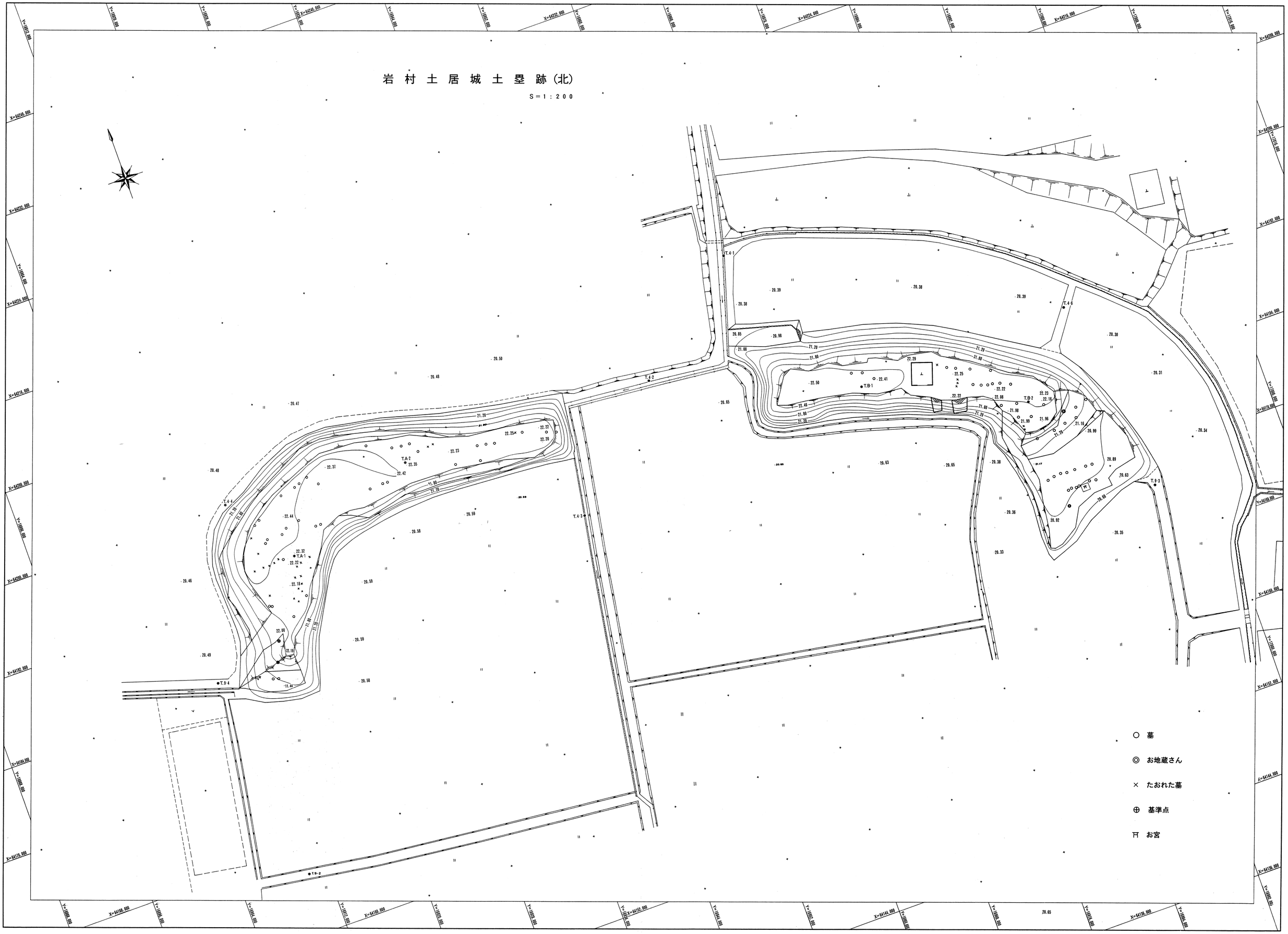
堀　SK7出土遺物



堀　ＳＫ７出土遺物

岩村土居城土塁跡(北)

S=1:200



南国市埋蔵文化財報告書 第15集

岩村地区県営圃場整備に伴う
岩村遺跡発掘調査概報

1996・3・31

発　行　南国市教育委員会
高知県南国市大埇甲2301
TEL　0888－63－2111
印　刷　川北印刷㈱